
ドラゴンクエスト? 空と海と大地と呪われし姫君と宝箱少女

ナック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンクエスト？ 空と海と大地と呪われし姫君と宝箱少女

【Nコード】

N2990R

【作者名】

ナック

【あらすじ】

3度の飯よりドラクエなオタクっこ娘、朝風沙耶あさかぜさやは念願のドラクエ？を購入！しかし、テレビを入れてもつかない。なんどもなんども付け直しても、つかない。そして気づいたらどんどんテレビに吸い込まれてゆき……！！ギャグ的ドラクエ物語！！笑いあり、恋愛あり、涙ありあり？の二次創作！お楽しみ下さい。

宝箱からこんにちは（前書き）

この夢小説の主人公や？の主人公の名前は変えれないんで注意！！

宝箱からこんにちは

今日は待ちに待った、ドラクエ?の発売日!

隠れオタクな少女、朝風あさかぜ 沙耶さやはドラクエが大好きで、今の所全作遊んでいる。もちろんこのことは友達には内緒だ。

「くくくくく……ようやくドラクエ新作が出来るぞ！」

自分の部屋の小さなテレビに買ったばかりのプレステ2を置き、新品ほやほやのドラクエを差し込んだ。

「ぽちつとな」

プレステに電源を入れた。

お約束の序曲（ソーソーソーソーのあれ。）が流れると思ったが、音とごろか、画面もつかない。

「あつれー？中古のプレステ買ったから悪かったのかな…それともソフトがバグったのかな…？まさかテレビが？？」

しかしテレビはつかない。

「ええーい！！電化製品は叩けば直る！！！！！！」

バゴーンとテレビにチョップをぶちかましてやるうと思ったが、

「うわわわわわわわわー！！！！！！？」

手が、手がテレビに刺さってる。

「えええええっ！？ちょ抜けないんだけど！！」
あがいても奥に手が進むだけだった。
しかもこんなときに両親が出掛けてるとは。

「いやあああああああつたすけてー！ー！！！！」
手はどんどんテレビに吸い込まれ、自分の体の半分まで入っていた。
そして私は…

すぽんっ

テレビの中へと吸い込まれてしまった。

「ドラゴンクエスト？ 空と海と大地と呪われし姫君と宝箱少女」

「いやあーこんな所に宝箱があるなんてねえ！兄貴い！！」

小太りしたオッサンが言った。

「ああ、途中ドラングとかいうモンスターに追われて死にかけたが、来て良かった。」

こちらはバンダナを頭に巻いた、クールな感じの少年が言った。

「さっそく開けるでやんす！！」

「ああ。」

ガチャ…

宝箱はゆっくりと開いてゆく。

「なんでい、きのみでやんすか。」

バンダナを巻いた少年が手に入ったのはいのちのきのみだった。
いや、ここはドラクエ風にしよう。

バンダナ（仮名）君はいのちのきのみをてにいった。

「帰りやしょう、兄貴。」

小太りしたおやじはお腹を抑えながら言った。

どうやらお腹が空いているようだ。

「ちよつと待つて。奥に何かがあるようだ。」

バンダナ君は宝箱に手をつ込みながら言った。

どうやらこの宝箱は二重層になっており、蓋を開けると奥に何かが見えた。

「あ、兄貴い…なんか動いてるでがす。気持ち悪いでがんすよ…」

怯える小太りのおじいだが（なんか名前変わってるよ）バンダナ少年は臆することなく手を探りつづけた。

がしっ！

「うわああああああっ！？」

「兄貴！？」

これは手だ。

人の手に違いない。

それも小さい……。

「ヤンガス！引き上げよう！！」

「ええっ！？……わ、分かったでがす！！」

もしかすると誰かが宝箱に入ったに違いない！

そういう事を見たことがないのだが、一度本でそんな感じのを見た事がある。それに、バンダナ君は嫌な気しなかった。

「「せえーのおっ!!」」

ドガッ!バギッ!!ボコッ!!!

恐ろしい破壊音と共にその手は引き上げられようとしている。

「痛い痛いっ!うわなんか頭に刺さったあああー!!」
人の声だ。それも女の子。

「よしっいくぞ……!」

全てが引き上げられ、女の子が現れた。
いやここはドラクエ風に……

女の子が現れた!

「き、君は……!?!」

「痛いよお……頭になんか刺さってるよう……。」
いかにも泣き出しそうな沙耶の頭は木くずなどがたくさん刺さっていた。

「あつ、ごめん!……ホイミっ!!」

バンダナ少年はホイミとやらを唱えら不思議。
沙耶の体はきれいに治っていた。

「あれ……?傷が……。つてホイミ!!??」
思わず叫んだ。

ホイミといえばドラクエでおなじみの回復呪文。
まさか……この人……本気のオタク??

沙耶はバンダナ少年をジロジロと見た。

頭にバンダナを巻き、茶髪に変わった黄色い服に青の服も着ている。綺麗な色合いだがこの世の物とは思えないほどドラクエ?の主人公の服に似ているのだ。

……んっドラクエ??

まさかこの人はコスプレしているのか??

しかし周りも見るとなんじゃこりゃ。

ど田舎でも家くらい建ってるよ?

「あのーお嬢ちゃん?」

小太りしたおっさんが尋ねた。

ああ、この人忘れてた。

「君はどうしてここにいるんだ?トラペッタの子か??」
少年が言った。

「……トラペッタ?」

「それは楽器でやんすよ。」

おっさんにつっこまれちよっと自尊心が傷ついた。

「うーむ。一応ここじゃあれだし、町で聞こうか。」

といい、おいでおいでと言う二人は歩きだした。

もしかして…これってナンパ?

いやいやいや!

そもそも二人はあるとき助けてくれたんだと思う!

テレビに吸い込まれたとき私は真っ黒なところに立っていた。

進んでみたら急に明るくなってきて出口が見えたから手を伸ばしたらガッて捕まれて…

ああ、木が痛かったな……。

思い出すと痛みも思い出したからやめた。

もしかしてこっつて…やっぱりドラクエっ!?

こうしてまたひとつ、新たな冒険の書が開かれようとしているので
あった……！！

宝箱からこんにちは（後書き）

今度は連載方二次創作です！

いまさらドラクエ？w w

どんどん入れてくつもりなんでよろしく！！

もしかしたら水飛沫超えるかも…。

み、水飛沫を浴びてもよろしくねっ！？

まさかの旅乱入（前書き）

キャラクター紹介

朝風 あさかせ
沙耶 さや

隠れオタクな少女。ドラクエ大好き。

武器は槍。スキルは剣・杖・槍・弓・宝探し。

まさかの旅乱入

私は困り果てていた。

なぜならそこにはドラクエの人物であると思われる方がいるからだ。

いや嬉しいっちゃ嬉しいけど…非科学すぎるってゆーか…

ああ、そうか夢オチ？

そう思いたかった。

「もうすぐトラペッタだよ」

バンダナの人はせいすい（最初香水と思ってびびった。）を振りまきながら進んだ。

夢にしたら現実的すぎるけど…

思わず私はほっぺたをつねってみた。

……痛てえーよばか。

「ようやくついた。ここがトラペッタだ。」

そこは大きな門があつて立派といえる町並みだった。

おや、門の前には白馬に乗った王子様が。

「あー、おっさん！」

とげとげぼうしが言った。

「お前ら…なにか見つかったのかのう？」

「ナ、ナメック星人……！！！！！」

そう。王子様じゃなくて緑色をした妖怪だったのだ。

「ん？この子は誰じゃ？？」

バンダナ君はちらりと私に目をやった。

きつと自己紹介しろって合図だろう。多分。

「えっと私は朝風……いやいや！沙耶です。なんか分かんないけど二人に助けてもらいました。」

苗字まで言ったらややこしいと思ったので名前だけにしといた。

アサカゼサヤって全部言われたらやだもん……

「そうだ俺たちの名前も言っただけだったな。俺はエイト。とある理由で旅をしている。」

「あつしは……」

エイトってソフトの説明書にもあったような気がする。

先に説明書読む派でよかった。

「ですが。よろしくお願いするでかす！！」

「え？なんて？？」

「……聞いてなかったんでがすか……？？」

あ、名前言ってたんだ。

「あつしはヤングスでがす！盗賊みただけど盗賊から足、洗ったんで！！」

「ふ……………ん。」

私は明らかに興味無さそうに返事した。だってあんまりおっさんの名前なんて興味ないもん。

「あつしだけなんか冷たいような……」

ヤングスはほつといて……

「わしはトロデじゃ。こっちは娘のミーティアじゃよ。」

え、娘？？馬のに??

このナメック星人は頭がおかしいんじゃないか？

「不思議に思う気持ちは分かるけど、今は後回しにさせてもらおうよ。君はあそこでなにをしてたんだ。」

エイトが聞いたので私はすべてを話した。

自分のいた世界のこと…

なにらかの事情でこちらに来てしまったこと…
すべてを話した。

しかしこの世界がゲームの世界であることは、言わなかった。
エイト達は驚いているようだが、最後まで聞いてくれた。
もしこれが夢なのならばこの状況おかしいだろうな…。

「つてわけ。信じられないでしょ？」

私はそこまで話して一息ついた。

自分でさえ信じられないのに、信じてくれないうなと思った。

しかし違った。

「そうか…別の世界から……」

3人？はうんうんと首振り人形かのように頷いている。

あほか。

「え、信じてくれるの…？」

「ああ、こんなときに冗談言うような時じゃないしこの世界じゃ、そんなことも珍しくないよ。」

そういえば思い出した。

たしかドラクエ？の主人公は別世界から来たという噂があるらしいし…それをいえば私もそんな感じかな？

こんなこと信じないだろうな絶対、と思ったがここはドラクエの世界らしいし…

「ふむ…それならいまお主は行くあてがないのじゃな？」

「あ、そうか。私お金無いんだ！」

現実世界でも無いのに…という愚痴はおいといて。

「なら沙耶も旅についてきたらいいよ！いいでしょう？陛下。」

「ふむ。見たところミーティアと同じ年に見えるし、大歓迎じゃ！
！」

え、えええええっ！？

わ、私がドラクエの勇者様と一緒に！？

勇者とかは知らないが、冒険に出るといふのは夢に見たことだ。
とてもうれしい。どうせ行くところもないのなら……

「お、お願いします！」

旅の理由（前書き）

キャラ紹介

エイト トロデーンの近衛兵士。

ドラクエ8の主人公 赤いバンダナがトレードマーク。

天然でたまにばかになる。料理は目が出るほど旨い。旨すぎるっ！

まじめそうに見えて、大の寄り道好き。

武器は剣。スキルは剣 槍 ブーメラン 格闘 ゆづき。

旅の理由

「わあ〜！どれにしようかな」

今私達は武器屋にいる。

私の武器と防具を揃えるためにエイトが買ってくれるそうだ。うれし〜い！！

銅の剣はこんなのだとか、ブーメランがおもちゃのようにしか見えなかったとか、いろいろ発見だらけだ。

私、^{わたくし}女子高生でも『オタク』なんで！うれしいっす！！
ひの木の手で本当に木なんだね！！

とたんに思い出した、エイト達の旅の目的。
もちろん、説明書どつりの話であった。

「そっいえばなんでエイト達は旅に出てるの？」

宿屋でゆっくりといすに掛けた三人は話合っていたところだった。

ナメック星人がいないのはどうやら、魔物に間違えられたかららしい。

ナメック星人も大変だな。

「つい最近のことさ。俺はトロデーン城の兵士だったんだ。」

「それでは陛下。城の見回りに行つてまいります。」

「あいエイト。いつもありがとのお……」

いえ、仕事なので。と適当に会釈しながら部屋を出た。
今日もいい天気だ。

窓を見るとふと気づいた。

子供達がなにやら集まっている……。
目を細めてじつと見てみた。

不気味に笑う道化師がいた。

子供達は何も思わないのだろうか、その不気味な笑いにエイトは気味悪くなった。

「……見回りするか。」

一瞬、道化師と目が合ってしまった。

にやりとこちらに笑いかけているようだ。

無視してエイトは見回りに出た。

胸騒ぎがする……。

自分は嫌な予感がとてもしているようだった。

それから、一時間が経った。

空はさつきまで晴れていたのに嘘みたいに暗い。

まだ午後くらいだと思つがこの夜並の薄暗さは異常だ。
もしやなにかがあつたのかもしれない……。

辺りを見るが、誰もいない。

まるで悪夢でも見せられているような気分だ。

不意に陛下と姫の事が気になり王座へともどった。

「いないな……。」

散歩でもしにいったのだろうか？

二階に上がり外を覗こうとしたその時。

パリーーーーーーン！！

窓が割れた。

どこからこもなく生えてきた根のようなものがある。

根のようなものにはよきによきと動き、エイトを襲いかかるうとした！

「う、うわああああああッ！！??」

思わず目を瞑ってしまった。防御のする暇もなかった。

何をすればいいんだ！

その時はつきりと映った。

目を閉じたことで真っ暗なのだが、確かに。青い光のようなものが。

それから根の音が消えた。

眩しくてなかなか目を開けられない…。

ゆっくりとまぶたを開けるとそこには、

変わり果てた城の姿が。

動物も人間もみな、石化され、

城は根に守られるように絡まれ、
そして美しかった城は、ボロボロの廃墟のような城になっていた。
その時、奇妙な笑い声が聞こえた気がした。

しばらくエイトは動くことが出来なかったのだが、はっとして気づいた。

陛下！姫！！

ダダダッと先を急ぎ、次々と部屋を見てまわったがほとんどの道が壊れてなかなか動けない。
宝部屋：から馬のような声が聞こえた。

「陛下っ！姫っ！！」

ぱんと荒く扉を開けるとそこにも変わり果てた二人の姿が…。

白馬と緑色をした怪物。

一目で分かった、二人だと…。

「エイトっ！無事だったのか！！」

「へ、陛下！なにがあったのですか！？」

二人はすぐそこまで近寄った。

この部屋が一番荒れていた。

「あのドルマゲスの奴…。代々から伝わる封印していた杖を手にして……！！」

ドルマゲスとはあの道化師の名前だ。

やはり、嫌な予感は当たっていたのだ。

「それで道化師は杖を奪い、呪いを放って……逃げたのですね？」
「そうじゃ、ミーティアは馬にされ……わしは魔物のようなものにされた。」

ブルルルウ……

悲しみは全て、姫の目からも語られていた。

二人は石化されず、別の生き物に変えられていただけのようだがどうして自分は石化しなかったのだろうか？

「とにかく呪いを解かなきゃいかん」

「どうやってですか？」

「ドルマゲスを倒すか、杖を破壊するか……。よし旅の準備じゃイトー！」

「え、ええっ!？」

「当たり前じゃろうが！わしもミーティアもこんな姿なんていやに決まってるっ!！」

「わ、分かりました。少々お待ち下さい……!！」

「とまあこんな感じで旅に出たんだ。ってなんだよその顔……?」

「だって……ねえ？呪いだなんて……あるわけないじゃん？」

「だってだって！陛下も姫もあんな姿になっちゃったんだぞお!！」
「エイトと沙耶は子供のように言い合ってる。」

「ヤンガスは半分寝てる……おいこら起きろ。」

「だってだってだって呪い実在してたら私、色んな人呪ってるよ！
？兄とか兄とか兄とか兄とかかにとか……………」

「いやいや途中『かに』入ってんじゃん！？ってゆーかお兄さん居
たんだね！びっくりびっくり！！」

「あの兄貴……沙耶嬢ちゃん……………」

ああ、二人が壊れたよホント……。まあ楽しそうだけど
沙耶も外見信じてなさそうだがもちろん信じてた。

だっていい子d……「説明書見てたからあー！残念！！」 ちよ、
言葉さえぎるなっ！！ってか誰だよあんだあああ！！

皆さん。

なにかと意味不だけど見てあげてください。
この子痛い子ですから…。

「あー……、いろんな意味で酷いや作者……呪われればいいのに
な……………」

キャッ、やめて？

とまあお遊びはその辺にしといて本編に入ります。

考え事もやめて武器を早く決めた。

「よし、武器きーめたっ！」

「木のやりか。うん軽いしいいと思うよ。」

木のやりなんて聞いたことのないのだが、この店だけのようで気に入った。

槍使いもいいなあ。

旅の理由（後書き）

こんにちはあゝナツクです。

只今水飛沫挫折ちゅーう（泣）

書こうと思ってもこっちの方がアイデアばかり出てしまい…
えへっ

ヤングスの泣く頃に（前書き）

キャラ紹介

ヤングス

こわもて風のおっさん。

しかもみんなからの扱いがひどい、かわいそうな人。

昔はアニマルヤンちゃんとか言われてたとか…

武器は斧。スキルは打撃 斧 鎌 格闘 人情。

ヤンガスの泣く頃に

「そういえば、これからどこ行くの？」

今私達は、海のように広がる大地の中にただ立っているだけだった。つてか未だに魔物来ませんが。もしかしてバグッた？

「ああ、実はトラペッタの人に水晶玉を洞窟で探してほしいって頼まれたんだ。」

「え、ドルゲマス…ドゲルマス…？あつゲルマドスかつ！」

「全部違うでやんすよ…。ドルマゲスでがす。」

ドルマゲスデガス…！？

あ、ヤンガスはでがすつて口調だからドルマゲスか。覚えづらいわっ
「えーつと…ドルマゲス…？は探さなくていいの??」

「んー…まあ、陛下もいいつて言ってるし、たまには息抜きもいいかと」

息抜きつて…私もエイト達も旅出たばかりだよね…？

ああー……モンスターに会いたいわ早く……。

「あースライムだつー！」

全く、モンスターは全然来ないし歩くの疲れたしなんかマップ、広くない？

「沙耶は右に回ってっー！」

ああー……アクセントかなんか起きないかな？

「沙耶っ！いい加減にしろおー！ー！ー！ー！」

「は、はいいいいいいいっ！？」

エイトに怒られ、はつとした。

「おおっ！スライムだっ！！」
「今かよっ！？」

ズデーーン！！

いやはや、これまた大きなこけかたですなーエイトさん。

「と、とにかく攻撃してっ！ヤンガスが死んじゃう！！」

「あ、あつしなら……ま……だ……」

ヤンガスは今にも弱小モンスタースライムに殺されそうだ。

「わわわわっ！ヤンガスも弱小モンスタースライムに殺されるんてかっこ悪いよねっ！！応援してるから頑張ってね！！」

「いや手伝ってやれよっ！？まじで真面目にして沙耶っ！！」

「しょうがないから分かった！くらえっ！！」

ドガッ！

スライムは倒れたっ！もしくは死んだっ！！

あと3体だ！！

「……ホイミっ！」

ホワーーーーン……

「ありがとでがす兄貴っ！！」

「よしっ！沙耶、ヤンガス！！たたみかけるぞ！！！」

作戦 ガンガン殺ろうぜ

「よおーしっ！くらっちまえっ！！」

沙耶が最後の一匹を倒した。ってか苦戦しすぎだ。

「よおおーしっ！いざ、ダンジョンにレッツらゴー」

「……はあ、はああ……。あ、あのエイトさん？」

「あ、兄貴い……。一回町に戻って休憩しやせんか……。？」

二人とも、はあはあ言ってる。

いやヤンガスがはあはあ言うのは非常に気持ちが悪いのだが。

「うーん……そうだなあ……。形勢も整えた方がいいし帰ろうかつ」

エイトさんがテンションすごいのはレベルがいっぱい上がったかららしい。

沙耶にはそのレベルが上がる喜びがとても分かる。

ああ、分かるとも……。 (遠い目)

そしてエイト達はトラペッタの宿屋に泊まった。

タラリタリタッティーン (宿屋に泊まる時の音らしい。ってかいるかこれ??)

「あ……エイトさんっ!」

宿屋から出るとかわいい女の子がエイトを呼んだ。

「あ、ユリマさん。」

「……?そちらの女の子は??」

「ええーつと…」

一瞬どきつとした。

もしかしたらエイトの彼女……？

「彼女が水晶玉を探してくれと言った本人だよ。」

「あ、そうなんだ！私沙耶。エイト達の旅についていくことになったのー！」

「そうなんですか。私、ユリマっていいいます。探してもらいたいの
が父の水晶玉なんです。」

二人は楽しそうに話している。

ヤンガスが空気のようにだ…。

「それじゃあ俺達は行きますんで。待つててくださいね！」
にこって笑うエイト。ユリマちゃんも顔が赤くなっている…。
この子もしかしてエイトのことが…？

「が、頑張ってください。エイトさんっ　沙耶さんもっ！」

あ、ヤンガス忘れられてる……。

ヤングスの泣く頃に（後書き）

えーヤングス大好きな方。

誠に申し訳ございませんっ！！

いろいろと扱いひどいですはい。

一応作者もヤングス好きですよ一応。

いざダンジョンへ!! (前書き)

今更ですがこの小説はネタバレ全開です。

裏ボスまで出すつもりですからね……。

まだドラクエクリアしてないっ! という方は今すぐ戻るを連打しよう

やってやんよっ! という方はぜひ見てあげて!

いざダンジョンへ！！

待ちにまつたダンジョン！

沙耶の気持ちは嬉しさで一杯である。

そもそも地球人がゲームの世界を体験する時点で嬉しい。もー、このまま戻らなくてもいいかな？と思いさえた。

（でも戻らないとあれかな……？）

そういえば、向こうの世界はどうなっているだろうか。

時間は進んでいるのだろうか、それなら私は今行方不明かな？

お母さん心配するかなあ……。

『あー？ めんどいからそこらへんの草でも食べといたらあ？？』

過去にそう言われたことがあることから、それははないなと思った。あのととき6歳の私にそれは酷すぎるよお母さん……。

そつえばよく、お母さんに似ていると言われる。なんでだろ？

「ほらほら、ぼーっとしてると魔物にやられるよ。」

（エイトみたいなお母さんだったら嬉しいのにな……。）

「何気に失礼な事考えるなっ！せめてお父さんだろ！？」

「おおうつ！？読みとられたあ！？」

「嬢ちゃんの思ってることは何となく分かるでやんすよ……」

かしこさの低いヤンガスまでっ！？

「よし洞窟についたよ。」

「うう……そんなに分かりやすい性格なんだ私……。」

いつまでも沙耶はウジウジしている。

よっぽどシヨックのようだ。

「はぁー……、いつまでもウジウジしないっ！もう洞窟だよー！」

「う、うん。ごめんなさいお母さん……。」

「いやお母さんじゃないし。ナチュラルに間違えるなよ。」

「は、はいおか……ギロツ！」……エイト様あー。」

「それでよし。」

……こえーよエイト様。

「兄貴……洞窟の中は真っ暗でやんすよ。これじゃあ進めないです。」

ヤンガスの言う通り、洞窟は真っ暗で足元も見えないほどだった。

これでは進むに進めない。

「困ったなあ……。なにか火が付く棒みたいな物があれば……。」

「

3人は悩んだ。

洞窟なんで木のようなものもない。

戻ったとしても、草ばかりで木もなかったはず。

「あ、ここにいい棒があったよ！これならちょうどいい長さだしっ！！」

「あーいいねそれ、早速火を付けよう！」

「あれ、それってどこにあったんでがすか？」

「なんか背中についてたんだー！私ってばラッキーガールっ」

沙耶がラッキーガールなのは置いといて……

「よしっ、トーポの出番だっ！！」

そう言つてエイトはねずみを取り出し（！？）手のひらに乗せた。

「ね、ねずみっ！？」

「うん。こいつはトーポって言つて、いつもポケットに入れてるんだー。」

沙耶はトーポとやらに目を向けた。

かわいらしい仕草をしている……。これはもう、ねずみと言つよりハムスターではないのか？

「それでそのトーポをどうするの？」

まさかこの小さな手で摩擦を起こして……。いや無理だ。そんな事を考える作者がおかしい。

作者「うるせえーなあ……。」

「今まで言つてなかったけど、実はトーポにチーズをあげると火を吐くんだ。」

「はいっ？ 火い？？」

何を言っているんだこの人は。

「嘘じゃない。ちよっ見てて……。」

エイトはトーポにチーズをあげた。トーポはチーズをおいしそうに食べている。

「なんだ何も起こらない」

「

ボウっ！！

「……え？」

棒に火が付いている。

只今沙耶の目が点になりましたーぱちぱちー。

「えええええーっ!? 火吐いてる!!??」

「あはは。えさあげるときも火吐くから大変なんだよ。」

「あははじゃねーよとんでもないもん飼ってんじゃねえーよ。」

「まあこれで火ついたし。進もうか。」

「トーポはポケットにまた戻った……と思ったらひょっこり顔を出した。」

「かわいいのにこわっ！」

「あ、兄貴、魔物でがす!!」

「ドラキーだ！」

「よおおーしっ！ 殺るぞおー!!」

「……そこ、漢字じゃないです。やるが殺るになってます沙耶さん。」

「……あれ、沙耶。槍は……!!?」

「何言ってるのエイト? ここにあるじゃ。」

「……無い。」

「あゝーっ!? や、槍がああああっ!!??」

「と、とにかく今は攻撃しろっ！ 殺られるぞっ!!」

「だからそこ漢字じゃないって。どんだけこのパーティー怖い発想してんだよ。」

「倒したでがすっ!」

「ナイスヤングス!!」

「エイトももう一匹倒して一件落着!!」

「で。槍はどうしたの?」

「置いてきたんですがすか?」

「ううん。だってここに来るまでも戦ってたじゃん。」

「せっかく買ってもらえたのに……」。

沙耶は泣きそうになりながらも持ち物をもう一度調べた。

……やっぱり、ない。

「ごめんね……エイト。」

「謝ることないさ。槍なんて無くしても、もう一度買いなおせばいいんだから。俺だって間違えて無くしたことあったし。」

「そうでやんすよ。それにまだ入ったばっかだから兄貴のルーラで戻れるでがす。」

「でもどこに無くしたんだろう……あんな大きい物。」

「うん確かに……。ちょうどこのたいまつくらいの大きさだよね。」

「うん。たいまつくらいの……。」

たいまつ……くらいの??

「もしかして……」

「ああ。まさかだけど……」

「「燃やしちゃった??」」

「あー！あの時渡したのがあー！！」
いや。どんだけあほなんだよ私。

「ま、一回町に戻ろうよ。ルーラで。」

「うん。……ありがとうっ！」

いざダンジョンへ!! (後書き)

みなさん、大切な物を燃やしてしまった事がありますか？
いや普通ないかww

いざダンジョンへ！！パート2

つということで仕切りなおし。

今度はやくそうなども買っておいたので準備拔群だ。

「（今度こそ）レッツらゴー！」

ちゃんとたいまつも用意したし槍も買った。（予備に2個）

この時点で私たちはやばいほどレベルが上がっているんでガンガン進んだ。

これならボスもらくちんだと思う！

「あ、エイト。あそこにモンスターが待ち構えているよ！」

「じゃあ武器は出したままにしておいて。俺が話しかけるからその間に、二人は後ろからボコンとやっちゃって。」

いや卑怯すぎるだろ……。

「ok！。いくよヤンガスー。」

二人もちよつとは遠慮という言葉を知らんのか。

「え、何ー？ 遠慮っておいしいのお??」

はあ……。

「やあ君。悪いことはしないから通してくれないかな？」

エイトが話しかけたモンスターはおおきづちだった。

大きなハンマーを持ち、毛皮のような物を被っている。

ちなみに作者が一番好きなモンスター。

「通すもんか！ここはおいらたちの住処だい！！ 仲間を売るようなまねなんて　　！！」

ガチャッ

二人はおおきづちの背後に回り武器を振り下ろそうとした。

「ぜひ売ってくれるっ?」

「ひ、ひいいいいいっ!? 売りますからっ!! ガンガン売って金儲けしますからあああっ!! (意味不明)」

「それならよーしっ!」

「ほっ……。」

只今おおきづちは冷や汗20?出ています。

冷や汗注意報が出ています。これは危険だっ!

「だけどあっしは仲間を売るまねはいけないと思うでがす……!」

「おっ、ヤンガスいいこと言っねえー! そういう事ならぜひ手伝うよっ?」

「え……ええっ!?」

おおきづちは逃げた! しまわりこまれてしまった!!

「逃げるのはよくないよ?」

「ナイスエイト!!」

「ひ、ひいいいいいっ!!!! た、たすけてええええええええっ!!」

その後毛皮をとられたおおきづちがいたとかいないとか。

いわゆる、脅迫である。

怖い。一言でいうと怖い。

一言でいうと悪魔すぎるパーティ。つまり死のパーティ……………！！

「さあもうすぐ、ボスと思うよっ！！」

それらしい部屋についた。

もちろん私たちは商売繁盛（魔物狩り）で死を恐れないっ！

もしもの時はトロデ王様がひの木の棒で駆けつけてくれるよっ！！

トロデ「いや、無理。」

「あ、エイトあそこに水晶玉がある！！」

「本当だ！！……………なんであんなところに？？」

そう。水晶玉は野ざらしにされていた。あからさまに隠っぽい。

「なーんだ！ ボスもないじゃん！！よーかった。」

なんて沙耶は水晶玉を手を取った！！

「さ、沙耶っ！？」

「ザッバ

ン！！ わし、誕生！！！！」

……………はいい？

「誰あの人？」

「さあ……………」

「人っていうか、モンスターじゃないんですが？」

「わしはザバン。ここでのんきに寝てたらこの水晶玉が頭にぶつかり。思い出すと腹が立つわい！！ 持ち主は必ず戻って来ると思ってたんじゃ！復讐してやるわい！！」

「わ、私たちは持ち主なんかじゃないよ!？」

「いや沙耶。ここは持ち主だと言っというて、戦おう! どうせそうしなきゃ無理だろうしね。」

「血が騒ぐでやんす!!」

二人はやる気だ。

私は正直……めんどくさいです。

ザバンがあらわれた!

「食らえっ! わしの十八番!!」

呪いがエイトに降りかかるっ!!

「エイトっ!!」

「わあっ!？」

しかし打ち消された!

「……えっ?」

ザバンも驚いている。

「よしっ、今だ!!」

私の攻撃が初、クリティカル!!

あーすっげえ気持ちいいー!

「ええっと……。沙耶は攻撃。ヤンガスは腐るまでテンション上げて!!」

「分かった!」

「……腐るまで……。でやんすか……。」

「くっ、なかなかやりおるのぉ！　だがこれならどうだ!!」

今度は沙耶に呪いをかけた！

「…きゃあああっ!？」

全く動けない。

これが呪いだとおお……!!

「沙耶っ!!」

「兄貴!!　テンションたまつたでやんす!!」

いつの間にかヤンガスはテンションがたまり、スーパーハイテンションとなった。

ここで説明しようっ！スーパーハイテンションとはっ!!

ドラクエ8ではコマンドに新たに『ためる』が追加されている。

つまりためることでテンションは上がり、スーパーハイテンションに!!

そのまま攻撃すれば、相手は撃沈すること間違いなしっ!!

「おらぁ食らえっ!!」

ヤンガスの一撃が見事にヒット!!

「ぐはあああああああっ!!!!!!!!」

ザバンはたおれた！

「やったでやんす!!」

「沙耶、大丈夫?」

「え、ああうん。もう平気。」

ザバンは頭を抱えている。

古傷のようだ。

「いたたた……。お主ら、持ち主じゃないな?」

「さっきからそう言ってるじゃん……。」

「とにかく、水晶玉は返してもらおうよ。取ってくれて言われてい
るんだ。」

「そうか……。ならそいつに一言言っしてほしい。」

「ごみは捨てるなああああああつ!!!!!!」

あまりにのザバンの迫力に沙耶は思わず尻込みをした。

傷痛まないのかな?

とにかく、水晶玉は取り返せた。

いざダンジョンへ！！パート2（後書き）

おおきづちの毛皮無しバージョンが見たい。

ご意見・感想お待ちしてまーすっ！

お気軽にどーぞー！

占いは当たる確立20%（前書き）

ゝザブキヤラ紹介ゝ

ユリマ 占い師ルイネロの娘。しかし血は繋がっていない。

多分エイトにべた惚れ。

ルイネロ ボンバーヘッド

占いは当たる確立20%

私達は今、トラペツタにいる。

占い師の娘、ユリマちゃんに水晶玉を返すためだ。

「たしかここだったと思う。」

エイトが指した場所は地味なところ、つまり目立たない場所だ。

「こんな所にドアが……。」

隠れ家みたいな家だなと沙耶は感じた。

普通なら気づくのは時間の問題だと思う。

私達はそこへと入った。

「エイトさん……！ 沙耶さん……！！えっと……や、ヤングスさん？」

よく思い出したなえらい。

「……胸が痛いでやんす。」

「約束の水晶玉、取ってきたよ。」

エイトは水晶玉をユリマに差し出した。

その時。

「ういー！ 帰ったぞおおー！！！」

「お、お父さん！？」

いかにも酔っ払っている人が来た。

この人がユリマの父親、もとい占い師のルイネロさんらしい。

なんというボンバーヘッド……！

「ん、なんじゃい！ そいつらは誰だユリマ？」

「えっ……と……。」

「お父さんの水晶玉を取りに行ってくれた人たちだよ！ これでお父さんも占い師に。」

「今すぐ捨てる！！ わしにはもういらないと決めたんじゃあああっ！！」

そう言うところ、ユリネロさんはユリマが大事に持っていた水晶玉を取り上げた。

「こんなもの

！！！！！！」

「お父さん！？ やめて！！」

「そうですよユリネロさん！ 彼女は貴方のことを思っただけに依頼したんです！！」

エイトはユリネロから水晶玉を取ろうとした。

沙耶とヤンガスは？ 　ただ啞然と見ていたとさ

「ぐぬぬぬぬっ……は、放せえい……。」

「は、放すもんかああ……。」

二人とも一生懸命水晶玉を取ろうとしている。

「……えいっ！」

バシッ！！

水晶玉が無くなったと思ったら、既に沙耶が奪っていた。

「いっえーいっ！ 水晶玉ゲッチュー」

沙耶は嬉しそうに水晶玉を抱き、そしてユリネロに見せびらかした。

「ほれほれえーいっ、悔しい？ 悔しい？ 今どんな気持ち？？」

「ぐくぬおおおう……！！」

「さ、沙耶さん……。」

「ゆるさんっ！！」

「へっへーんっ！ こいつを返してほしければ言うこと聞きなっ！
！」

「沙耶……。誘拐じゃないんだから……。はああー。」

「がーん、失望されたっ!?」

「当たり前がす。」

「すらりとつつこむなばか。」

「お前ら……。わしをばかにしているのか？ こうなったら力づくでも水晶玉を壊してやる……!!」

ルイネロさんの堪忍袋の緒が切れたっ!!
と、思ったその時。

「お父さんっ!! いい加減にして!!」

残念。娘の方でしたあー。

これには皆びつくりした。

「ユ、ユリマ……!?!」

「お父さんおかしいよっ！ 私は占いの当たらないお父さんなんて嫌いつ!!」

ガーン!!

ルイネロは鉄砲玉食らった鳩みたいな顔をした。

面白いなー。

「私は……お父さんと血が繋がってなくても……ちゃんとした、占い師の娘だよっ!!」

「ユリマ……! お前、わしの子じゃないこと知ってたのか……。」

なんという急な展開だ。

まさか血の繋がらない親子とは……。

イイハナシダナーとか言ってる場合じゃないよこりゃあ。

「私の両親はなぜか死んじゃって、お父さんが代わりに育ててくれたんでしょ……? お父さんは両親が死んだのは自分の占いのせいだっと思ってるそうだけど私はそうは思わないよ!!」

「ユリマ……。」

「それに……私はお父さんの自信に溢れた凄い占いを見たいしね！」

「ユリマあ……！　わしが悪かった……。わしは……。わしは……。」

なんだろう。

とても居づらい空気は……。

「なんか居づらいですが……。」

ヤンガスも同じようだ。

エイトは今の話に感動しているみたいで涙を流しそうにしている。

「旅の者……。悪かった。これから前向きに占い師としてやろう！」

「あ、じゃあ占ってもらえますか？」

「おう！　なんじゃなんじゃ？？」

ルイネロは偽の水晶玉をどかして持ってきた水晶玉を机に置いた。

「人探しなんです……。ドルマゲスって分かります？」

「人探しなら得意分野じゃよ。んっ？　ドルマゲスってライラスの弟子じゃなかったか？？」

エイトに話してもらったライラスとはドルマゲスの師匠らしく、旅に出たとき探し回った人らしい。

どうやら火事で死んだと言ってた。

「はい。今、あいつを探してます。」

「よし……。任せろ。むむっ！？」

「分かりましたかっ！？」

沙耶は占いかしたことがないから、とても興味津々でどうするのか楽しみなのだが。

水晶玉意味ないような気がする……。

だって見てないじゃん。

「これは……。塔か。たしかこれはリーザスの……。ここに奴は居る

に違いない!!」

「どうするエイト?」

「とにかく行こうよ。なにか分かると思うし。」

「あつしは休みたいですが。」

「いやもう3回くらい休んだじゃんか。」

「それではルイネロさん。ありがとうございました。
私が部屋を出ようとしたその時。

「お主。この世界の者ではないな?」

「えっ?」

占いは当たる確立20%（後書き）

やっとトラペッタ編終わりですねー。

次はツインテールのあの人が登場するかもかもっ！！

暴力反対（前書き）

こんな私に感想を送ってくださるプリニートラハールさん、広地 永
久さん。

本当にありがとうございますっ！

暴力反対

正直、甘く見ていた。

まさかゲームの世界の占い師が私のことを当てるとは……！！

「ま、まああつてるんですけどね。」

「やはりな。」

「えっ……ええっ！？ 沙耶さんが違う世界のつて……ええっ！？」

「おっさん。沙耶嬢ちゃんの事、なんでわかるんでやすか？」

「長年占いをしてたらわかるもんじゃよ。この世界とは違う、オーラみたいなものがな。」

ルイネロさん……。それはもう占いじゃなくてエスパーでは？

「つてことは沙耶の元の世界に戻る方法もわかるのでは？」

エイトが尋ねた。

確かに、そうかもしれない。

でも、元の世界に戻るのはまだちょっと……。

もうちょっと居たい気がする。

「残念だが、そこまではわからん。とにかく、足を止めてわるかったな。」

なんか占いつて理不尽だよね？ 大事なところがわからないし。

まあでも助かったかも？

エイトともいたいしねっ！！

んっ？

なんでそこ、エイトなの！？

いやいやもつと魔物を見たいとか、魔王も見たいとか、キラーパンサーが見たいとか……！！

「それはねえだろー！」

「えっ！！ 沙耶どうしたの！？」

「はっ。いえいえーやましいことなんて何も考えておらぬぞよー！」

「怪しすぎるですが。」

「う、うるさいなーヤンガス！ 肉団子にするぞー！」

ギヤミギヤミギヤミギヤミ……。あーうるさい。

「じゃ、じゃあ私達は行くんで。色々とお世話になりましたー！」

一応礼をして、急いで外を出た。

「お腹空いたなー。」

「そういや、あっしら全然食べてないですがね。」

「二人とも、何言ってるんだよ……。ついさっき食べたじゃん。」

「あれ、そうだったけ？」

「そういや、食べた気もするがすね。」

「そんなことより、陛下に報告するぞー。」

「「はい。」」

ほんとにエイトのことお母さんって言ってるかい？（しつこい）

「ほお……。次はリーザスの村か。」

「たしかここから左の方ですね？」

私は左を見た。

「そっちは右でがすよ。」

「……………」

今度こそ、左を見た。

「いやトラペッタの門見てどーすんだよ……………」

「えっと……………。どっちだっけ？」

「茶碗持つ方だよ。ってかその頭はヤンガス以下だぞ……………」

「あはは……………」

「あつしと比べないでほしいですが。」

「それはこっちのセリフだわ。かしこさ2と比べられたくねーよ。」
かしこさ2とは、本当である。

「二人ともー。置いてくぞー。」

エイト達はもう先に歩いてた。

「いつの間につ！ ちょ待ってよー！！」

「ううつ……………。人が気にしてるのに、ひどいですが……………」

あ、気にしてるんだ。

意外とリーザスの村はトラペッタから近くて、すぐに着いた。

しかし周辺のモンスターが強く、早く泊まりたい気分だ。

「わーっ！ 空気がいいのぉー。」

言っちゃ悪いけどそこは田舎だった。

ちなみに私が田舎だと決めるのはコンビニがあるかどうか。

……………この世界にコンビニなんて無いじゃん。

改めてこの世界の不便差を知った。

でもこの世界の店なんてほとんど24時間営業の多いねー。

そうやって宿屋に行こうとすると、

二人の子供がいた。

いやべつに珍しくはないが、子供は私達に向けて銅のつるぎを構えている。

もう片方は鍋をかぶっている。可愛いなw

「やいっ！ お前ら見ない奴だな！くらえっ！！」

「わわっ！？ 危なっ！！」

子供は私に向けて剣を振舞ってきた。

ガキンッ！ガキンッ！！

「ちょ誰ですかー！！ この子の親はああああっ！？」

「日頃の罰がす。」

「うん。」

「二人ともひどっ！？」

しかしエイトとヤンガスにも攻撃が入った！！

ってかこの子供とエイトの武器一緒じゃん。

「うわっ 危ねーな！」

「ちょやめてえー。そのイガイガ帽子とるなでがすー！！！」

子供なので攻撃なんて出来ず、色々といったずらされるばかりだった。疲れて宿屋に行きたいってのに……！！

「よしマルクっ！ 二人で攻撃だー！！！」

マルクと呼ばれた少年は被っていた鍋で周りを攻撃し、

青髪の銅のつるぎを持った少年は慣れてない手つきで剣を振り回した。

ってか銅のつるぎで人も刺せるの、知ってた？

「やめんかつー！！ ポルク、マルクー！！」

「ひっ！？」

誰かが止めくれた。親だろうか？

「お前らはほんま……！！ いらんことしいやのおー！！」

ああ……。まさかの関西弁おばちゃんですか。

ドラクエにも関西弁が……。あるわけねーだろ。

「すんませんほんまねー。」

「い、いえ。全然大丈夫ですよ。」

正直、関西弁のおばちゃんが怖い。

「この……。ばかぼんがつ！！」

ポカッ！

おばちゃんはお供達の頭を殴った。じゃなくて叩いたか。

子供達は頭を抱えてその場に崩れた。

「痛つてえー……。おやじにもなぐられたことないのに……………」

「うわーんっ！！」

なんかガン〇ム的なこと言ってるし。片方泣いたし。

「最近、殺人があつたんよ。アルバート家の子がなあ……………」

「それですか……………」

だから子供達はよそ者を襲つたらしい。

「はた迷惑な話でがすなあー。」

「ほんますいません。おわびといっちゃなんやが、泊っていかへんか？」

迷わず、私達は泊らせてもらった。

ふふふっ……。！これでお金節約できるぜ……………。

タラリタリタッティーン！（しっこい。）

次の朝が来た。

「ほんで、どこ行くんやエイト？」

「ああうん……って口調おかしくなってるない沙耶？」

「あ、ほんまやー!？」

思わずおばちゃんのがうつってしまった。

訂正訂正……っと。

「で、どこ行くの？」

「えっ……っと。アルバートさん宅に伺いに行こうと思って。なんか知ってるかもしれないしね。」

「結構豪邸でやんすね……。緊張するでがす。」

「確かに……。」

そう。結構な豪邸だったのだ。

エイトはそういうの慣れてそうだけど……

「おじゃまします。」

「お、おじゃましちやいまーす……。」

「おじゃまするでやんす……。」

ドラクエのやばい所は人の家に勝手に上がれるということだと思っ。そして人の物を壊すという……

「おらあっ!」

パリーンッ!!

「エ、エイトさん……。」

「沙耶嬢ちゃんもするでがすよ。」

ガシャーンッ!!

「わ、私は遠慮しとくよ……。」

『キヤ ツ!?!?!?』

その悲鳴は突然、この家中に響いた。

「げ。ばれたかな？」

「とりあえず行くでがす。」

「わ、私は何もしてないもん……！」

私達は悲鳴の聞こえた方へと、走った。

暴力反対（後書き）

ゼシカさん出ませんでした。

期待してた方ー申し訳ございませんっ！

次こそ（多分）出すよっ！！

ゼシカがない（前書き）

サブキャラ紹介

ポルク 銅のつるぎを持った大人びた子供。言葉より先に動くタイプ

マルク おにやべ（お鍋……って書かないと分からないよ）

ゼシカがない

『NO

ッ！！？？』

その悲鳴は誰でも震わすことのできる悲鳴だ。

「あれ、前回と違ってないセリフ？」

作者「めんどいんだ、いいだろ。」

「とりあえず、行ってみるがす」

悲鳴が聞こえた部屋についた。

たるや壺などが多いから物置場……かな。

そこには小さなメイドが一人、突っ立っている。

「どうしたんですか？」

メイドはもう泣きそうになっていた。

「お、奥様にここの部屋のそうじを頼まれたのですが……。」

「ちゅーっ。」

「キャアアアッ!？」

「……なるほど。」

「ねずみかぁー。」

怖がったのか、ねずみは穴の奥へと逃げた。

「ああっ！？ お隣はゼシカお嬢様の部屋……!!」

「どうする、エイト？」

「うーん。確か、ここの部屋ってポルクとマルクが邪魔で入れなか

「つたんだよね。」

ポルクとマルクに、

『ここは姉ちゃんの部屋だ！ 勝手に入る事は許されていないぞ！』

「つてなканじで追い出されたんだっけ。」

「兄貴。ここにねずみが通れるくらいの穴がありやす。」

「うん。知ってるよ。」

「いらついてない？ エイトさん。」

「あ、そーだ。トーポを潜らせたらどうか？ なんかあるかも。」

「それいいね。さっそくしてみようか。」

トーポはエイトのポケットから降りてそのまま、穴に入った。

「何か見つかるといいんだけど……」

（15分後）

「あ、トーポがなんか持ってきたよ！」

手紙のようなものを持って帰ったトーポは、一仕事を終えてまたポケットに入った。

「なんだろう……。」

「ちょプライバシーが……。勝手に見ていいの？？」

『私は兄さんの敵を討つまで戻りません。』

自分の信じた道をいきます。

お母さん、ごめんなさい。

そしてポルク、マルク。騙してごめんね。

ゼシカ
『

「これって……一大事じゃあ……。」

「あ……ああ。とにかく確認しよう……！」

タタタツッ!!

ゼシカの部屋の前についた。

「おい、お前らまだ諦めてねーのか。何回も言うが、ここは……」

「そんなことより！ これ見てよポルクう!!」

「な、なれ慣れしく呼ぶなよ！ なんだこれ？」

ポルクは一文字ずつ、ゆっくりと手紙を読みあげた。

最後の方はなんかぶるぶるしてたけど。

「たたた、たいへんだあー!!」

「ポルク。姉ちゃんの部屋を確認しよーよ!!」

ガチャ！

「……い、居ない。」

「窓が開いてるから窓から出たんだね……。」

「どうすれば……。そうだ!!」

「ふえ？」

ポルクは沙耶の前に駆け寄り、頭を下げた。

「わわっ、そこまでしなくても。」

いくらなんでも、こどもに頭を下げられたらね……。

「たのむっ！ あんたらの力を貸してくれ!!」

「よし分かった!!」

はやっ!?

「人助けは気持ちいいもんですが。」

あんたは前まで盗人だったでしょーが。

「よ、よかった！ なら今からついてきてくれ！塔まで案内しよう

！

「え、今？」

「マルクはこのことをみんなに知らせるんだ！！」

「あいさぁー！！」

「今からじゃちよつとね……。武器ぐらい見せてほしいんだけどなあ。」

そういえば、武器も防具も見なかった。

「ばっ！ 姉ちゃんがいなくなったらどうするんだよ！！」
「わしゃたちが死んだらどうしてくれんだよ。」

「はやく行くぞ！」

「仕方ないなあー。行こう、沙耶、ヤングス。」

「おなかへったなー。」

「あつしは休みたいでがす。」

「さつき泊まってたじゃん。あ、老化か。」

「二人とも、ひどいでがす……。」

緊張感の『き』もないパーティだな。まあいいか。

なんだかんだで塔の前についた。ってかポルクって戦闘参加しないのかよ。

「大きなドアだなー。」

重そうなドアが沙耶たちの前に堂々と建っている。

「あかないでがすよ？」

「うそー？ あ、ほんとだ。」

ドアはおしてもひいてもびくともしない。

「はっはっはー。じつはそれは……。」

「おしてもひいても駄目なら上げちゃえば？ えいつー！！」

ガラガラガラ……

なんとドアが開いた！

セキリティー弱いから盗賊とか入るんだよ。

「な、なぜ……！？」

「あんましょくないと思うよこのドア。」

「うんうん。ヤンガスみたいなばかならともかく、私でも開けられたし。」

「な、この数年間一度も部外者に開けられたことがないこのドアが……！？」

当の本人はとつてもシヨツクな様子だった。

いや、ヤンガスもシヨツク受けてた。

「と、とにかく俺はここまでだかな！ 後は頼んだ！！」
ピュー。

ささつとポルクは逃げるように（完璧逃げた）走っていった。
あ、こけた。

「じゃ、行こうか。」

2回目のダンジョン。私達はゆっくりと階段を登っていった。

ゼシカがない（後書き）

今度は近いうちにドラクエ主人公全員出る小説書きたいなーと思つてます。

もちろん、沙耶ちゃんも出る予定ですよー！！

ダンジョンは遊びじゃないっ！

2回目（3回目）のダンジョン。

今度のダンジョンは広い。皆、迷ってしまいそうだ。

「ここは鍵が掛かってるな……。」

「遠周りするしかないみたいだね。」

敵もなかなか強く、いきなり沙耶達は苦戦していた。

「やっと中に入れたかな。」

「中也広いなー。」

中は薄気味悪く、外と同様。仕掛けも多かった。

こんな所をゼシカは一人で行ったとなると、凄いと思う。

……ゼシカってやっぱり、パッケージにもいた女の子かな？

もしかすると仲間になるかもしれない。そうになったら女の子増えて嬉しいかも。

「沙耶嬢ちゃん。どうしたですか？」

「え？ いやー次の敵の対策をと……。あはは。」

「別に考えてないでしょ？ ほらさっさと行こう。」

「へーい。」

たわいもない、緊張感もない会話をしながらまたひとつ、階段を登った。

にしても、長いな……。

「なんだろこれ。行き止まりか？」

目の前はただ壁。

でも今の所全部行っているので行き止まりということはまず無いは

（ヤンガスが悪いんだ……ヤンガスが。）

（あつしは何もしてないですがよ！？ ひどいですがっ！嬢ちゃんのせいですがよー！！）

「はい二人とも。聞こえてますから。罪のなすりあいすんな。」

ほんっとこのパーティは……。遠足かつっ一の。

しかも幼稚園レベル。

「「んだとおおおおっ！！」」

ひいー。

ちなみにこの小説のナレーションは作者でっせ。
知ってた？

「だーっから、騒ぐなあああっ！！」

「「ひっ！？」」

エイトが一喝した。

いやエイトが今までで一番声がかいよほんと。

「ほらー！ 魔物が来たじゃないかー！！」

「いやエイトさんのさっきの声じゃあ……」

「なんか言ったか？」

「いえなんでもございませぬ。」

早く戦えよ……。

「いつちよかんりよーっと。」

「つかれたー。まだこのダンジョン終わらないのぉー？」

「もうすぐじゃないですか？ 多分。」

ヤンガスの言うとおり、実はもうすぐだった。

「今日は終わるうか。MPも切れてきたしね。」

え、ちよもうすぐだよ？

「さんせーいっ！ 宿屋にレッツゴー」

ほんとにいいの？後悔するよ？イベント見ようよ？

「なんかナレションが言ってるけど無視しようかつ」

て、ためーら後悔しても知らないからなああああっ！！

ってなわけでイベント前にして沙耶一行は今日も休んだ。

「うーんむにやむにや……。スライムが一匹……二匹……三匹……ト
ロデも一匹……。」「

その思いを胸に刻んで（前書き）

ちよつと残酷描写発見。

ああー後悔したよ、最初からR15にすればよかったかもしれない。

その思いを胸に刻んで

ダンジョンに再び来た。前回も言ったが、イベント前で一度帰った。しかも村に戻ったら戻ったで、戻ってくんなっ！てポルクに怒られたりもした。

「だからあっしは言ったじゃないですかー。」

「もうちよつと大きい声で言えっ！！」

だってヤンガスの事なんて誰も信じないもん！！（ひどい）

「とにかく、ここまで来れたんだからいいでしょう！？ 行きやしよう！」

「ヤンガス今日晩御飯無しな。」

「ええっ！？」

「ここが最上階？」

「……誰？」

ツインテールのお嬢様風の子が像の前にいる。

「もしかして……君が………？」

「ようやく来たわね……この盗人！！」

「え、………ええーっ！！??」

突然、ツインテの子がエイトに向かって『メラ』を出した！

「ちょ危ないって！ ガチで火傷するからやめてくれっ！！」

「くっ……、さすが盗人というだけはあるわね。えいっ！！」

「ぎゃあああああーっ！？ 私の方にも来たああああっ！！」

「あっしが焼き鳥になるー！」

「ちょこかまと逃げて……くらいなさいっ！！」

「だから違っって！ 俺達は君を探しに……」

「問答無用っ！！！」

ツインテの子のメラがどんどん大きくなる……。

「メ、メラミかっ！？」

「いいえ……メラよ……。。」

なんかこのセリフ、聞いたことがあるような気がする。

「いっけえー！ サーベルト兄さんの仇！！」
危ないっ！

やめろ

ゼシカっ！！

「に、兄さん……!?!」

その声は沙耶達にも聞こえた。それはリーザスの像からだ。

やめるんだっ
ゼシカ。その方達は俺を殺した奴
じゃない……。

「や、やめろ言われたって、メラは止まらないわよっ」

ボシュッ!!

「わーっ!!」

なんとかゼシカがメラをコントロールし、当たらずに済んだがメラは像に当たってしまった。

「兄さんっ!!」

ゼシカが像の前へと駆けけた。

俺は今、リーザスの像を借りて話している。 だが時間は少ない……。

「兄さんは……一体誰に……!?」

あれは俺が、この塔の見回りに行ったときだ。

いつもどおり、サーベルトは塔の見回りに行っている。村の者は平気だと言っているのだが、なかなかこれは欠かせずぼ日課となっていた。

「む。今日も平和みたいだな。」

最上階まで行き、像を拝んだ。

「これから先も、ずっと平和でありますように……。」
帰ろうか。

振り向いた途端、異様に感じた。

人の、気配………!!

「誰だっ!!」

青ざめた顔。

メイク……だろうか。顔に模様がある。

「ひっひっひ……。」

なんと気味の悪い笑いだろうか。

そのときサーベルトは震えていた。

確かに、震えていたんだ。

「貴様……どこから入ったあ……！」

剣を抜いた……はずなのに。

「ぬ、抜かない……だと……！」

一歩、二歩、三歩、四歩。

近付いてくる、あいつ。

「くそっ、くそおお……！！　なんでだ……！！？」

駄目だ。

体がいうことを聞かない。

「お前の……名は…………？」

「私かね？　私はドルマゲス…………。」

「ドルマゲス……だな。貴様の名、一生忘れない。」

「ひひひひ……。私も君の事を忘れないよ。絶対に。」

あいつ……ドルマゲスは俺の前に来た。

ぐさっ!!

「ぐはっ!？」

「悲しいなあ……悲しいなあ……。もう君とは会うことが出来ないなんて」

「がっあ……。」

「君の死、絶対に無駄にはしないよ……。」

「ひーひっひっひー!!!!」

何かが俺の体を貫いている。

何かが俺の心を邪魔している…。

母さん、村の皆……………ゼシカ。
すまない…。

「そんな……。そんなの、ひどいよ。」

「ドルマゲス…。くそつ、遅かったか……………!!」

ゼシカ。 本当にすまない。

「に、兄さん……。ひっく」

ゼシカは今の話を聞き、泣き始めた。

「うつうつつ……………！ 兄さん……………!!!!」

旅の方、必ずあいつを見つけては倒してほしい。
あいつの狙いは……………俺達、七賢者の子孫だ……………。

「七賢者……………。」

「なんなんだそれは？」

もう 時間みたいだ。

「そんな……。兄さん行かないでっ!!」

じゃあ、頼んだぜ旅の方。 またな、ゼシカ。

「やめて……。やめてええっ!!!!」
ゼシカは像にすがり込んだ。
しかしもう何も聞こえない。

「……………」
「エイト、どうするの…?」
「そっとしておいてあげようよ。一人にしてほしいと思うしな。」

「……………」
「……分かった。」
出口への階段に向かった。

「……………」
「……待つて。」
ゼシカはその場に立ち上がり沙耶たちを止めた。

「あ……………」
沙耶はなんとなく、声をかけずらかった。
しかしゼシカは一通りの涙を拭くと、元の顔に戻した。
「疑ってごめんなさい。家に帰ったらなにかお礼でもするから……。」
「君はもういいのか?」

「もう少し……。一人で居させて。」

「分かった。」

「大丈夫なんかな？ 一人で。」

「まあ、本人が言ってるんだ。仕方ないだろ。」

（結構敵も強かったけど……そうだ、キメラの翼置いておこう。）

沙耶は足元にキメラの翼を置き、エイト達のあとを追った。

その思いを胸に刻んで（後書き）

実際にこのイベントをしてるとき、泣いてるゼシカに話しまくってヤンガスに怒られて、しぶしぶ帰ろうとリレミットしたら使えなくて歩きかよっと思って階段に行ったらゼシカに止められてと…
そういう思いがありますわ。うんなつい。

カルシウムは大事（前書き）

すっかり忘れていた、王様と姫様の紹介をします。

「ひどっ！！（ひひんっ！！）」

トロデ トロデーン城の王様。

誠に残念ですが呪われている。（デロデロデロデロデッ

デーン）

ミーティア トロデーンの馬……じゃなくて姫様。

こちらにも呪われている。（以下省略）

カルシウムは大事

あれから私達はアルバート家に向かっている。
その間もしばらく沈黙が続いていた。

「……………」

うう…。

はやく村についてほしい。

只ずっと願うばかりであった。

「あ、あれゼシカじゃない？」

「ほんとだ。なんかもめてるけど…。」

つてゆーか私らの方が先にダンジョン出たのになんでもうついてるの??

「お母さんの分からず屋！ あたしは旅に出るって言ってるじゃない!!」

「ゼシカ！ あなたはアルバート家の……一人の娘。あなたがこの家から離れることは絶対に許しません。」

「だーからっ！ もうこの家とは縁を切るんだってば!!」

「なんかお取り込み中だけど」

「あんまし中に入りたくないがすね。」

「えっ、でもお礼してくれるらしいし…。」

「もう諦めたら？」

「で、でも……。ぐぬぬっ……………」

なかなか諦めれないらしい。

エイトは超のつくほどコレクターだからな……。

「やあ君たち、ゼシカに何の用だい？」

…突然きのこが話しかけて……んっ、きのこ??

「き、きのこォー!」

「えっ?!」

「沙耶嬢ちゃん。きのこじゃなくて人間でがすよ。」

「うそだ! そんなはずがない!!」

「きのこじゃなくて河童でがすよ。」

「うわぁ…僕、悲しいな……。」

「で、どうしましたキノピオ?」

「キノピオじゃない。」

「なんでやんすか河童のクウ。」

「クウでもないから。夏休みないから。」

「二人とも、失礼だよ?」

「おおあなたがたがリーダーですか? ちゃんとこいつらに言っ
やって下さいな!」

「絶対、おばけキノコだろ」

「う、うわぁああー……んっ!」

「なるほどっ！ ドラクエだしおばけキノコかあー！」
「あれ、キノコどっか行つたよ。」
あのー……。あんまし、人の事を言つてあげないほうが……。
ああ駄目だ。全然聞いてないや。作者まいっちゃう。

「もう しらないっ！！ こんな家出て行つてやるわー！！！」

「「えええつ !!!!!」」
そんな事言つてる間にゼシカが怒つたじゃないか。
しかもなぜあんたらが先に驚く。

「ポルクマルク！ そこどいてっ！！！」
「ひっ！？」
なんかポルクマルクって芸人の名前みたいだな。

バタッ！

「ジャジャーンッ！ どう？」
「ね、姉ちゃん！？」
扉から出てきたゼシカの格好……。それはまさに。

「む、胸が……。」「
じゃなくて！ パッケージと同じじゃないか！！
なんかおかしいと思つてたんだよ。最初メイド服みたいなんだつた
から……。」

「じゃ、兄さんの仇取つて帰ってくる。今までありがとうございま
したー。」

あつ、ゼシカー。

報酬忘れてません？

「あ、そうだ!!」

お、思い出したか。

「志村動物園録れておいてねー!」

違うんかいっ!

つてかあるのかよっ!

「なんか突っ込み所多いよーな気がするんですけど……。」

「多分、作者の遊びだから気にしないで?」

「……あつ、報酬貰ってない……………」

「ほんとでがすね。」

つてゆーか、報酬じゃなくて『お礼』だよな?

物かお金かも分からないよね??

つてエイトさん……?

「追うぞ。」

「は、はひい !?」「」

「ちょ、宿屋にも泊まってないじゃんか!」

「兄貴! ここはもみじまんじゅうでも食べて、落ち着きやしょう

「!」

「うんちっ!」
「ひい」
「追うって言うたら追うんだあああっ!」
「!」

カルシウムは大事（後書き）

作者「突然始まり、突然終わる……。」

「ちょっと、裏話コーナー！！」

作者「てなわけで突然始めました、裏話コーナー。今日のゲストは沙耶ちゃん！」

沙耶「なんですかこれ？」

作者「まあまあ、すわってすわって！ 個人情報聞きたいんだよ。」

沙耶「言っていいんですかそれ……。」

作者「言わないんだったら100匹スライム呼んで永遠とバトルしてもらいます。」

沙耶「分かりました！ 喜んで言います！！」

作者「よろしい。では質問。スキルの宝探しって？」

沙耶「ああ。それはヤングスと似たスキルですね。例えば、宝探しという技があって世界中の宝の位置と中身がなんとなく分かります。」

「

作者「なるほど。とまあこんな感じでオリキャラ沙耶さんに質問したいことがあるという方はぜひ私にお知らせください。多分、答えます」

沙耶「多分て……。」

作者「メッセージでも感想でもいいよ！ 適当でいいんだよ！」

「こいつ、うそつきです！」

「はあはあ……。し、しんど。」

「やっかついたポルトリンク。」

「しかも私のHPが14くらいになってるんですけど。」

「エイトなんかもう、MPとRP（理性ポイント）ゼロじゃないですか。」

「やっかついたがすね……。うえっ、はきそう……。」「ヤングガスもK・o寸前。」

「さあ！ ゼシカを探そう！！」
「キラキラ！」

「なんでこの人は元気なんでしょうか。」

「エイト。先に宿屋に泊まろうよ。」

「え、でも……。」

「じゃないとエイトの武器全部売るよ？」

「ガーンッ！！」

「エイトは豆を食らった鬼の顔をした。おにはそとー。」

「ごめんなさい！ 反省しますからそれだけはやめてー！！」
「なんかエイトの弱点が分かった気がした。」

「それじゃあ、泊まろうか！」

「やっただがすー！！」

「反省の顔が見えたエイトの顔がまた、輝きだした。」

「ごめん。先行つてて！」

「え？」

エイトはそのまま武器屋へと駆けていった。
ホント、武器好きだなー。

「じゃあ、先行つておこうか。」

「やったー やつと休めるでがすー！」

「ええーと……。これとこれとこれっ！ まとめてください。」

「おお、あんちゃん。なかなか目がいいな。それはここ限定だよ。」

「わあーいっぱい並んでるー。」

エイトは武器屋で1時間ほど、商品を見ていた。

「えーとヤンガスの斧と……。あ、鉄の槍！」

よかったー。沙耶の武器がずっと木だったから、これで安心だ。

「さて、そろそろ帰りますか。」

「まいどありっ！ またよあんちゃん！」

帰る前に、この町のもの全部調べたいな。

ちよつとくらい別にいいだろうし。

エイトは町の酒場についた。

なにか有力な情報あればいいけど……。

「あのー、すみません。教えてほしいことがあるんですが……。」

「あらお兄さん。今はダンス中よ。待ちきれないのは分かるけど、

少し待っててね。」

……。
なんとなくここは場違いのような気がしてきた。

「んー。なかなか眠たくならないや。」

酒場を出てエイトは少し、海の風に当たっていた。

帰らないと。多分、みんな心配してると思うな。

帰りながら思ったのだが、沙耶はどうやって自分の世界に戻るのだろうか。

沙耶がこの世界に来た理由はドルマゲスとあの杖に関係あるのかな？
無関係の場合もあるけど……

沙耶は元の世界に帰りたいのだろうか。
そうになると、寂しいな

勝手な考えだけどまだ居てほしいと思う。
でも、本人は帰りたいに違いないだろう。

「……………」

最近、なんかもややする。
なんでだろ。

「た、ただいま」

そーっと、まるで会社から遅く帰ってきたお父さんのようにエイトは部屋に入った。

「……………遅い。」

げっ！ 沙耶まだ寝てなかった！！

ヤングスは……うん、いびきうるさいくらいよく寝てる。

「今何時ですか。」

「えーっと……。お昼の12時？」

「ちがうわっ！ 深夜だよ深夜！！」

「へ、へえー。時間経つのが早いんだね。」

『ごーまーかーすーなーあー！！』

うわあ、沙耶の考えが小説のように読み取れるよ……。

作者「実際、小説ですから。」

「で、なにしてたの？」

イライライライライライライラ……！！

「ひ、はいっ！ 武器見てましたあー！！」

なぜか反射的にエイトは正座した。

「ぜったい、それだけじゃないよね？」

イライライライライライライラ……！！

「え、は、それはその……。」

「何い？ 聞こえない」

さ、沙耶のまわりが……絶対漫画だったら横にイライラって文字あるよ。

「ごめんなさいっ！ 酒場で情報聞いてましたあー！！」

ブチッ

「ひ……！！？」

や、やばい沙耶がある意味スーパーサイヤ人になってる！

「酒場で……情報………だと？」

「すいませんすいません！」

や、やられる……！！

「なんだ、情報聞いてただけなのかー。」
「なんと許してくれた。」
「よ、よかったー。」

「で、情報は？」

「……………！？」

「あれ、聞いてない？　もしかしてそれ嘘なの？？」
「いや、だれも知らなくて……………」
「イライラ略。」

「へえー、誰も知らなかったんだーあ？」

「いや本当だつて！　とにかく、これあげるから許してくれっ！」
鉄の槍を沙耶に渡した。

「あー！　新しい槍！！」

「実はそれを探すためにずっと探してたんだ。」

「え…………？」

「ごめんなさい、嘘です。」

「すぐ言うのは恥ずかしいからな。まあ、渡せてよかったよ。」
神様、沙耶様、ごめんなさい。もっぱら嘘です。

「あ、ありがとう…………。ごめんね、強く言つて。」

「うつん、いいよ全然。こちらこそ、心配かけてごめんな。」
「エイトさん、最低。」

「う、うるさいなっ！　しかたないだろっ！？」

「どーしたの？」

「え、いやなんでもないよ……」

「それじゃあ、もう寝るね。」

「あ、ああお休み……。」「

「くー。」「

「寝るのはやつ！」「

いつかのび太を超えるよ君。

「ぐがああああー。」「

「ね、眠れねええー！！」「

翌朝、エイトは寝坊した。

こいつ、うそつきです！（後書き）

エイトさんの意外な性格。

新しい仲間

「さて、ゼシカを探しますか。」

「……………」

「どうやらエイトは寝不足のようだ。」

「沙耶嬢ちゃん。後行っていないのはどこらへんがすかね？」

「多分、船場だと思うよ！　ね、エイト？」

「う、うんそうだね……………。はあ！　ねむい」

エイトを無視して私達は船場についた。

するとそこにはゼシカがいた。

いたんだけど…………。

「だーかーらあー！！　船出してって言ってるでしょう！？」

「で、ですがあいにく魔物がいて…………。」

「そんなのあたしがやつつけるわよ！」

「し、しかしアルバート家のお嬢様にそんな…………。」

「察しが悪いわね！　あの家とは縁を切ったって言うてるでしょう！？」

「（どうする沙耶？）」

「（嫌なことに巻き込まれそうだから前には出ないでおこうよ。）」
「こそこそ話をするもゼシカはこちらの存在に気づいてしまった。」

「なら、あの人達があたしの代わりに倒せばいいわ！　それならいいでしょう？」

「「えええええっ！？」「」」

「たしかに…………。それならば…………。」

「ちょ何勝手に決めてるんだよ！ そんなの聞いてないよ！！」

「そうでがすよ！ あっしらはそんなこと関係ないでがす！」

「そーだそーだ！」

「でも貴方達も困るでしょう？ 南の大陸に行かないとドルマゲスも追えないでしょうし。」

「うつ……。」

「だから魔物を倒して！ お願い！！」

「そ、それは確かに正論だな……。」

「それではっ、しゅぱーっ進行ー！！」
つてなわけ私達は魔物を倒すため、航海の旅へと出た。

「これはっ！？」

頭に急に浮かんできたのはドラクエおなじみの『序章』！

このタイミングで流れるもんなんだ！

つてことはまだ……序章！？

あんだけやつといてまだまだ旅はこれからですよっていうのか！？
この小説永遠に終わらないんじゃないかねえーのかあ！（ぶっちゃけ）

「そ、そんな……とほほ。」

「どしたの沙耶？」

「あ、えっとヤンガスの帽子がとれないかなーて気にしてたの。」
「いらないだろその心配！ 確かに中気になるけども！」

「どうしたでがす、二人とも？」

「「い、いやなんでもないっす」」

「にしても、魔物なんて全然来ないじゃん。」
「たしかにそうだな。」

一方、その頃その魔物は……

「またか、あの船。俺様の上を通るなんてゆるさねーぜ！」

俺様の名はオセアノン。

この海最強（自称）の魔物だ。

しかしその俺様も機嫌が悪い。

あの、海の上を渡る人間のせいで、だ。その前にそいつが人間かどうかもしらないが。

「ふっ、俺様がこの頭痛アタックで落としてみせる！！」

俺様は勢いをつけて海の中から船を狙い……………！！

ガゴンッ!!

「わっ、船が揺れた!」

「なんだなんだ?」

急に船が揺れたかと思っただけ赤い物が浮かんで来た。

「あ、エイト。タコだよタコ! おいしそうだね!」

「なんかあのタコ。たんこぶ出来てない?」

「きつとタコも事情があるんでがすよ。さっ戻りやしょう。」

私達はポルトリンクに戻り待っていたゼシカに報告をした。

「あ、どうだったの?」

「魔物なんていなかったよ!」

「これでもう大丈夫じゃないか?」

「これから貴方達は船に乗るよね? あたしもついていていい?」

「い、いきなりだなあ!」

「ね、ねっ? いいでしょう?」

「いいじゃんエイト! 戦力上がるしゼシカがいたら楽しくなると思うよ!」

「それならいいか。よろしくゼシカ!」

「こちらこそ、よろしくね!」

そして、私達に新たな仲間が出来た。

「よーしっ！ 海賊王にわたしゃなっちまうよー！！」

なんとなく、言ってみただけだ。（謝れよ！）

新しい仲間（後書き）

作者「突然始まり、突然終わる……。」

「ちょこつと裏話コーナー！」

作者「次の質問です。沙耶さんのお兄さんはどんな方ですか？」

沙耶「あほです。」

作者「いやもうちょつと分かりやすく。」

沙耶「じゃああほでバカでオタクでかに以下野郎です。」

お兄さん「ひどっ！ 妹よ、それはひどいぞ！！」

作者「おや、沙耶さんのお兄さんではごさいませぬか。」

沙耶「ちっ」

お兄さん「純粹だった妹がなんか腹黒キャラになってるんですけどっ！」

作者「それでは次回、お兄さんの生態について語りたと思っています」

いじめと見ていいですか？（前書き）

キャラクター紹介

ゼシカ ボンキュッポーンな少女。沙耶と同年には見えない。

武器はムチ。スキルは短剣 ムチ 杖 格闘 おいろけ
さあみんなで！ボンツ キュツ ポーン！！

いじめと見ていいですか？

「うーん、潮風が気持ちいいー！」

私達は南の大陸に向かう船に乗っている。

しかもゼシカのおかげでなんと船代タダ！

エイトは剣の手入れをしている。

ついでに槍の手入れも頼んでおいた。エイトは武器オタですからッ！

「そういえば、気になったんだけど……。」

樽に座っているゼシカが疑問を浮かべた顔をして言った。

「どうしてエイトをヤンガスは『兄貴』って呼ぶの？ 普通逆の気が……。」

「あ、確かに。そういうの全然気にしてなかったけど、エイトとヤンガスってなんで知り合ったの？」

なんとなく面白そうなので私もゼシカの隣の樽に座った。

エイトは心クールそうだが見た目はひ弱そうな感じもあるので不思議に思ってみたんだ。

ヤンガスも確かに親分みたいな感じがする。

「よくぞ聞いてくれたでがすよ！ 言いましょう。あっしと兄貴の愛のメモリー……がはっ！」

「なんでそうなってるんだよ！」

「え、もしかして二人っ……！？」

「か、勘違いするな沙耶っ！ 全然そんなじゃないから！」

「……………」

「ゼシカの無言が逆に痛い！」

「そう。あれは兄貴が旅出てすぐでがした……………」

「もう始めてる！？」

『あつしと兄貴の愛のメモリー（仮説）』

トロデーンとトラペッタを行き来するために作られた橋を陛下と姫と俺で渡るうとしていた。

しかし……。

「やい、ここを通るなんてこのヤンガス様が許さねえ。装備と金を置いていきな。さもないければ……。」

「なんじゃお前。聞いたこともない奴じゃのう。」

「はあ？　ここらじゃ知れたこのヤンガスを知らねえだと？」

「陛下。どうやら盗賊のようです。どうしますか？」

「無視じゃ無視。いくぞエイト。」

俺達は構わず、橋に向かう。

「待てごらっ！　置いていかないならば俺が相手すんぜえ！」

「仕方ないのう……。いけ、エイト。」

「はっ！」

俺と盗賊は橋の上で二人。

「おらあっ！」

突然斧を盗賊が振り下ろす……。……も。

「な、なにに！？」

俺はバックステップでかわす。

「甘いな。攻撃力は強そうだがすばやさはまだまだのようだ。」

「く、くそ抜けねえー！」

盗賊は必死に斧を取ろうとしている。

その間に俺達は橋の向こう側に渡った。

「お、おい待てよ！！」

やっと抜くことが出来たが橋は木で出来ている。

つまり……………。

「うわあっ！」

盗賊は川へとまっさかさま……………というわけだ。

「あ、あぶねえー。た、たすけてくれっ！」

しかし盗賊は橋のロープを持ちなんとか落ちずに済んだ。
だがそのロープももうすぐ切れてしまう。

「エイト。そんな奴のことなんざほっとけ。さっさといくぞ」

「しかし……………」

なんとなく、可哀想に見えてその場を離れられなかった。

「た、たすけてくれえ……………」

「……………陛下。申し訳ございませんが少々お待ち下さい。」

盗賊が持っているロープを引っ張る。しかし思ったより重い……………。

グイッグイッ……………。

「ッ……………！」

「ぐっ……………は、はあー。」

……………なんとか持ち上げた。

「大丈夫か？ 怪我とかは……………」

「エイトさんっ！」

「はいっ！？」

急に盗賊がその場で正座し、俺を呼んだ。

「エイトさん……………いや、兄貴と呼ばせて下さい！」

「はあっ！？」

「一生ついていくでがす兄貴！」

陛下も驚き、すぐさま降りてくる。

「おい！ エイトはわしの兵士じゃぞ！ そうなれば普通お前がわ

しについてくるじやろうが！」

「おっさんのことなんざ関係ねえんだよ。そんなことより兄貴！
付いてつてもいいですか！」

「え、……ま、まあいいんじゃないか？ うん。」

とりあえず戦略になるものは嬉しいし。

だって陛下……口には出せないけど戦闘手伝わないし。

「よろしくです！ 兄貴！！」

「そういうわけで、あつしは兄貴についていくことになったんですが
すよー！」

「なんか、どうでもよかった気がするわ。」

「うん私も。」

「なんていうことを言うんですが！ ここからが感動するんですが
すよー？」

「感動もなにも、何も感じないよ。」

「あ、ついたみたいよ」

「わーい！」

「ちょ、あつしを置いてかないでえー。」

「……………（スタスタスタ）」

「兄貴も引きながら超スピードで離れないでえー！」

「ち、ちくしょー！ 涙で前が見えないですー！！」

いじめと見ていいですか？（後書き）

作者「突然始まり、突然終わる……。」

「ちょこつと裏話コーナー！」

作者「それでは沙耶のお兄さん。自己紹介を」

沙耶「うっす、俺の名は朝風沙耶^{あさかせさすけ}。ゲーム大好き！特にファイナルファンタジー！！」

作者「あれ、沙耶の兄なのにドラクエじゃないんですか？」

沙耶「おれはあんな感じは好きじゃないんだ。逆に信じられん。」

沙耶「FFの方が信じられないよ！やっぱりDQでしょ！？」

沙耶「はっ、あんなドラゴンとそんなに関係ないRPGなんて……。」

沙耶「そっちこそ、なにがファイナルかも分からないファンタジーじゃん！」

作者「あのー。二人は世間で何て呼ばれてる？」

「「ロープレ兄弟」」

作者「めっちゃ納得。」

とりあえず、沙耶への質問。受け付けてます。

破壊は健全だ（前書き）

これもまた、ひさしぶりですね。

破壊は健全だ

「さて、船着場に着いたところで……。」

「あ、武器とか見るの？」

船着場は結構色んな人がいて、武器とか珍しいのがあるそう。

エイトとか、目キラキラになるんじゃないかな？」

ガシャ！

「あのー……、エイトさん。なにをしてらっしゃるのでしょーか…

…」

「破壊」

「そーですか……。」

「なにを引いてる。アイテムを貰っているんだよ。」

「いや全然同意の上とかじゃないでしょ！ 武器屋のおじちゃん、震えてるよ！？」

「あたしもするべきかしらね……。」

「駄目だよ！ 特殊な人以外こんなことしないよ！ 警察に面倒みてもらうことになるよ！」

「警察って何ですか？」

「……。え、偉い人だよ。」

しまった。ゲームの世界に現実のこと教えるとめんどくさいのにい。そうこう言ってる間にもエイトはガシャガシャと……。

「ちっ、しょばいな。」

「もう主人公じゃないよね！？ 悪党だよね！？」

「世界を救ってやるんだから、いいだろ。」

「うっ……。それは正論……。」

「それに、沙耶もしてるんじゃないのか？」

「！」

た、確かにドラクエのゲームの中ではしてたけど！
壺割るのたのしいーとか言って割りまくってたけどっ！

「もう、ほとんど無いでがすよ。」

「全部割ってしまったか……。まあいいや」

「沙耶がなんか打ちひしがれてる。」

「そーか、自分もしてたんだ……。」

小さい頃、お母さんの高かったつば（にせものだけど）も割ってしまっ
たし、

お父さんが大事にしてた、コップも割っちゃったし……。 （凄い怒
られた）

お兄ちゃんのゲームソフトを踏んでしまい、割れた事も……。 （ざ
まあみる）

「そーだよ……。私も、悪かったんだよ……。」

「なんか沙耶から罪悪感のオーラが出てきたよっ!？」

「ゼシカ。破壊は、文化だよ。」

「なにその、新しい歴史!？」

「あ、ゼシカ。海だよ。」

「話の逸らし方雑ね！ しかも知ってるし!」

「わ、私は……。本来捕まるべきなんだよ……。」

「沙耶嬢ちゃん……。」

「こっちなんかもう感動的な感じにつ!」

「ゼシカ。ツツコミは任せたよ……。がくっ……。」

「いらないわよっ！ 仲間になっていきなりツツコミ役とか!」

「あ、ゼシカ。船だよ。」

「だからエイトは何なの!？ もう明らかめんどくさそうだよねえ
!？」

「全く、これだから若者は」

「エイトもまだ未成年でしょうが！ なにその年上アピール!」

「あ、ゼシカ。空だよ。」

「もういいよっ！」

ゼシカはもうはあはあ言ってる。お疲れ様。

「疲れたなー。宿屋に泊まろうかー。」

「ぜひそうして……、はあはあー。」

一方その頃、ポルトリンクでは。

「……………。わしら、忘れられてない？」

「ひひーん……………」

「エイトさん。なんか最大の忘れ物をした予感がします。」

沙耶は思い出して言ってみた。

エイトは寝る寸前だったから機嫌が少し、悪い。

「…………しんどいからまた今度でいい？」

「いや、今取りに行かないと大変なことになりそうで……………」

「くかー。」

「無視して寝られた！」

仕方がない。私も寝ようか。

どうせなんともないだろうね。

トロデ王は、今日も月の真下で眠れない夜を過ごした…。
忘れ物も、ほどほどに。

破壊は健全だ（後書き）

毎日疲れる中で小説を黙々と執筆する私……。
なんかかつこよくね！？

朝風沙耶の憂……すんませんでした。（前書き）

最近地の文少ないような気がした。

それはまずい。まずすぎるよパトラッシュ……

朝風沙耶の憂……すんませんでした。

「全く！ わしらを忘れるとは何て奴らじゃ！！」

やっぱり、私達は最大の忘れ物……トロデ王を忘れていた！

「す、すみません陛下……。あまりにも陛下の影が……………」

「なんか言ったかエイト。」

ギロツ！トロデ王はエイトをするどく睨む。

「な、なんでもございませぬ。」

「ならよろしい。」

トロデは安心したのか、馬車に戻った。

「しかし、おっさんのせいでポルトリンクに戻っちまったぜ。ったく……。」

「だれのせいじゃだれの！」

「まあまあ、お二人とも。」

私はとりあえず、二人を落ち着かせた。

手間がかかるなあもう。

「でもヤングスの言う通り、船もう乗れないわよ？」

「ほーら、ゼシカ嬢ちゃんも言ってるじゃねえか。ばーかww」

「だからわしら忘れられただけで、お前らが悪いじゃろうが！ あと、wwとか使うな！」

うう、さつき落ち着かせたのにもっとヒートアップしてるよ……

「沙耶、お疲れさんだよほんと。」

「うう、私ツツコミなのかボケなのかわかんないよ……………」

「大丈夫、沙耶は天然だと思う。」

「天然！？」

エイトは分かったような顔してうんうん頷いてる。
ってゆうか……。

「エイトだけには言われなくなかった!!」

「えええっ!？」

「この小説のエイト紹介文見てみ。」

私はここには無いはずのPSPらしきものをエイトに授ける。

「ほ、本当だ……。ひでえ、ひでえよこりゃあ……!」

その文章を見てエイトは死体を見たかのように弱気な声を出した。

「このメンバーじゃ、一番までも常識人だと、思ってたのに……。」

「

「それもおかしいと思うよ!」

ああ、もうツツコミ決定なのか、私……。

ギャグでコメディーなものにはツツコミは必要不可欠だもんね…。

「とにかく、兄貴。早くいきやしようや。」

「どうやって行くの？ 船ないって言ったでしよう?」

「いや、兄貴は空飛べるんですがすよ。だからそれで。」

「え、空飛べるの!? エイトって人間だよね!？」

そう、ゼシカはまだ知らないんだ。

人が空を飛ぶ瞬間。

「さ、兄貴! お願いしやす!」

「え、ほんとに飛べるの? ってゆーか、空飛ぶってことはエイトに乗るの!？」

ゼシカはいかにも疑問疑問つといった顔でヤンガスを責めている。
読者の方ももう分かったんじゃない?

「……………ルーラ。」

「それかい！？ 紛らわしいわよ！！ てかエイトテンション低っ！」

もしかすると、ツツコミはゼシカがしてくれるのかもしれない。
あーよかったー。

「いやよ！ このメンバー疲れるわっ！！」
よ、読まれたっ！

つてなわけで船着場に今度はちゃんとトロデ王も忘れずに戻った。
ほんと、二度手間すぎる。

「え、なんかわしが謝らなきゃいけないの？」

「……まあ、いいんですけどね。」
パーティーに無言の嵐が襲い掛かる。
トロデー人、おろおろおろ……。

「まあ、いいんですけどね。」

「怖い！ 無言の後それ怖い！ 謝るの逆だと思いがちよつと謝り
そうになった！」

「よしみんな、気を取り直していこー！」
「「「「「おー」「」」」」」

「いや、みんな無視しないで？ ね？ ほら、わし待ってる間に錬
金釜という素敵なものを……」

「お、モンスターが来たよ！ 戦闘だー」

「「「いえーい」」」

「……………しくしく……………」

トロデは一人、馬車に体育座りで皆を見つめた。
……………可哀想な王様。

一方、とある酒場にて。

「くつ、フラッシュか……………」

「まだまだたぜ！ おらあ！」

盛り上がる、人席の周り。俺はその真ん中にいる。
とは言っても、周り全員むさい男だらけさ。

つたく……………可愛い女の子でも来いよっつーんだよ。ちくしょー

「ふん、さつさと終わりにしてやるよ。」

「なに！ フルハウスだと！？」

さて、と……………。帰りますかね。

「待ておらあ！ てめえ、イカサマ使いやがったな！」

「なんの事だい？ 俺様はただ、真剣勝負をしてただけだぜ？」

「てめえええ……………！」

ふ、こいつの頭の悪い脳でも俺のイカサマを見抜いたか。
そこだけは認めてやろうかね。なんもあげないけど。

「野郎共！ こいつを殺れええええい！！」

「「「「 おおおおおおお！！！！」」」」

予想以上にここは、暑苦しいみたいだな。

「さて、どうしますかね。」

「俺様に出会ったことを呪うんだな！」

「ふ、それはこっちのセリフさ。」

このクール様が相手してやるか……！

その時沙耶達にも考えられない、最低の男がいることに、
まだ、誰も気づいていない……………。

朝風沙耶の憂……すんませんした。(後書き)

沙介「突然始まり、突然終わる……。」

ちよこつと裏話コーナー！

沙介「わーぱちぱちー。」

沙耶「……なんでいるの」

作者「……いやなんか、出たいて……ずっと。」

沙耶「ずっともいやだよ！」

沙介「はっはっは。照れるな我が妹よ。」

沙耶「照れてないっ！」

沙耶「だいたい、お兄ちゃんって本編に出ないんでしょ！？ なのになぜ！」

沙介「いや、実は出るらしいんだ。」

沙耶「……嘘だろ？」

作者「ほんとだよ、ちよつとただけだけど。」

沙耶「ちよつとも嫌あああああー！」

沙介「はっはっは。照れるな我が妹よ。」

沙耶「あんたの目はフナか！ どこが照れてるように見える！？」

作者「兄妹が壊れたので、今回はこれで！ グッバイ」

喧嘩しても仲は良くない(前書き)

M男さんが登場！

喧嘩しても仲は良くない

「ふいー。結構このモンスター強いね……。」

「あ、沙耶。あそこに大きな建物があるわ！ 皆も早く！」

ゼシカが示した指の先の建物は、とても大きな修道院だった。

「ほんとにでかいな……。ここは確か。」

エイトはトロデ王に視線をやる。

「ああそうじゃ、ここはマイエラ修道院じゃよ。」

視線に気づいたトロデ王は答えた。

マイエラ……マイヤラ……マイメロ？

「そうか、ここであのピンクのうさぎに出会えるんだね。」

「なに考えてたのかは知らないがそれはないと思うぞ沙耶。」

エイトが正確なつつこみに入った。

「つつこみでもらえただけでもありがたく思え……。」

「エイトー沙耶ー早くー！」

「兄貴いー。嬢ちゃーんー！ 置いていくでがすよー？」

いつの間にかゼシカとヤングスが建物の扉の前にいた。

それを私達は追って、修道院の大きな扉の中へと、入った。

「つて、あの二人どこ行っただよ。」

「ひえー、門もでかけりゃ中も広いんだねー。」

早速迷子……。いやある意味ゼシカ達が迷子？

「いろいろ聞き込みしてみようよ。」

「そうだな。あ、すいませんちよつといいですか？」

「なんじゃ？」

頭ツルツルピッカピッカのおじいさんに話しかけた。

「おじいさんとは失礼なっ！　わしはまだ20じゃ

！

」

.....。

「「は??」」

今、なんと？

「だから20と言つとるじゃろつが！　お前ら頭も悪ければ耳も悪いんか!？」

うわ、今のはいくらなんでも力チンときちゃうね。

「でもエイト。怒らないでおこ.....」

「ほう、いくら爺さんおじいでも今の言葉は聞き捨てられないな.....。」

武器...ok!

魔法...ok!

スーパーハイテンション...ok!

「って駄目に決まってるわ

!!!!!!」

思うよりも先、私はエイトを引っ張りその場を離れた。

「痛いっ、痛いって！　引きずるなあー!」

「問答無用!」

ただでさえ迷っているのに私はエイトを引きずりながらがむしやらに走った!

「服破れるって!」

「問答無用!」

ただでさえエイトは薄着を着ているのに構わず走った。

「首絞まるって!」

「問答無用！」

ただでさえエイトは首が細いのに構わず走る！

「千の風になるって！」

「問答無用！」

「いいの！？ なってしまっても無視なの！？」

「問答無用！」

「うわあああああー！ 沙耶が怒ってるううううー！」

「当たり前！」

とにかく走る。走る走る走る走る……………

ドガッ！

「い、いたたたたたた……。」

突然、誰かとぶつかった。

「誰だ、神聖なるこの修道院を走る奴は！」

「わわわ、ごめんなさい！ お、お怪我はありませんか？」

「おや、お客様でしたか？ それはそれは申し訳ない。あなたこそ大丈夫でしたか？」

「あ、いえ……。」

背が高い人だな……。それになんかどっかで見たことのある……………。

「おい、俺には謝ることはないのか？」

エイトが立ち上がり、背の高い青い服を着た男の人の真正面に行つた。

「申し分けない。あなたもいたのですか？」

「……っ。」

「ははは、背が低くて見えませんでしたよ。」

「……っ。」

「しかし野郎よりも女性の方が好みでしてね。そこをどうしても
らえます?。」

「……………だまれこのM野郎。」

……………ついにエイトが言ってしまった……………。

そう。この人は頭が……………M字なのだ……………っ。

恐らく本人も気にしているのか、その額に血管が浮き出る。

「ほう……………このマイエラ修道院団長に……………そのような事を……………」

「へえ……………マイエラはイケメンが多いと聞いたけどおっさんもいる
んだなあ……………」

ビキビキビキ……………二人の間に火花が散る。

「（沙耶、ここは放っておきましょう）」

「（あ、ゼシカ！ うんそうだね。大変そうだもんね。）」

ゼシカに呼ばれて私もそっとその場を離れた。

「……………で沙耶……………ってあれ??」

エイトは周りも見ても、このMしかおらず……………。
その状況にMも気づき……………。

「「あいつ話の途中で帰りやがった!」」
見事にハモったようでした。

喧嘩しても仲は良くない(後書き)

あれ、マルチエロってこんなに女性好きだっけ

祝10000アクセス突破！ 番外編『学校生活』（前書き）

どーもどーも、あなただけのナックです

……ごめんなさい。だからその包丁をおろしてください……

……はい、それでは番外編です。

沙耶の学校生活、そしていかにも最終話の前話みたいな終わり方の
番外編。

お楽しみくだいませ。

祝10000アクセス突破！ 番外編『学校生活』

沙「やあ皆！ ドラクエ8でおなじみの沙耶だよ！」

エ「だれに言ってるの。急にどうした。」

沙「なんと作者がいない間にいつの間にか10000アクセス超えていたんだよ！」

エ「もうちょっと毎日チェックしようよ！」

沙「しかも、今だにクールが仲間になってないのに番外編だよ！」

エ「すまん……クール……………」

沙「さあ皆！ 番外編はやりたい放題やるかね！」

エ「いつもやりたい放題しているような気もするが。」

沙「さあ、はっじまつるよー！」

ドラゴンクエスト？ 空と海と大地と呪われし姫君と宝箱少女 番外編

～朝風沙耶の学校生活～

今は8：00である。ちなみに学校へは8：45分。そして学校では30分かかる。と、いうことは？

「そう、遅刻になってしまうのだよ！」

「じゃあ早くいけよ！」

私がガッツポーズを決めたところで兄の一喝。

「ふ、ニートに言われたくないね。」

私は片手をひらひらさせながら挑発してみる。

そして私は起きたばかりで朝ごはんを食べている所さ。

「ニートじゃないわ！　つというか深夜までドラクエしてるお前に言われたくない！」

「お兄ちゃんこそ、FFしてたくせに……。」

「うぐっ」

兄……朝風沙介は胸をおさえた。……ふりをする。

「二人とも。喧嘩してないで用意しなさい！」

朝風家一番の天然、お母さんはのんきに洗いものをしていた。洗いもの……

「お母さん……今日、仕事じゃなかった？」

「あ、そういえば母さん準備してないな……。」

突然、お母さんの額からだらだらと尋常じゃないほどの汗が滲みでる。

この反応はやっぱり……

「そうだったよう

！！」

「「やっぱり忘れてた！」」

すっかり忘れていた。

「おい、沙亜子。俺の朝飯はないのか。」

「あ、あなた……。」

出ましたよこの家の大黒柱。

会社でもとてもお偉いさんで、いつも怖い性格をしている、礼儀にはうるさいお父さん。

そして唯一空気の読めない人間。

そしてわがままでもある。ツンデレでもある……え、それはいらない？

「……二人とも、学校はどうした。」

「え、あ、その……。」

「ち、ちよつと今は……まだ……。」

「まだ、だと？」

ギロリ。

お父さんの眼が妖しく光った。

「い、行つてきまゝすッ!!」

急いで靴を履き、その場から逃げるかのように（実際は逃げた）出かけた。

「あーもうッ！ お兄ちゃんが話しかけるから遅れたじゃん！」

「俺は注意してやったんだぞ！？ そもそも、注意したのに俺まで遅刻しそудらうがッ！」

私達兄妹は朝っぱらからガミガミガミと言い合いを続けた。
時計はもう30分は軽く超えちゃってます（汗）

「んじゃ！ 私こつちだから。」

「おう、お互い遅刻だがまあ頑張ろうぜ！」

お兄ちゃんに別れを告げ、学校に向かって走った。

キーン……コーン……カーン……

「ギリギリセーフ！間一髪!!」

私は叫びながら教室の扉を開けた。

「おおっナイスすべり込みっ！」

周りに尊敬のまなざしで見られる。いやーどうもどうもー。

「いや、アウトだからな朝風。これ授業開始のチャイムだからな？」
「へ？」

先生に言われて時計を確認してみる。……………。

「さて問題。今何時でしょう？（最高の笑顔で）」

「えーっと……………。夜の九時？」

「お前はどこを見れば夜と思うんだ！？ 朝の九時だ！」

「…………。せ、先生！ この時計間違つてると私は思います！」

「大丈夫だ。俺の腕時計は正確だから。」

「…………。」

ああ、もう言い返せない。

クラスメイト達は私が遅れるのは何回も見てきたので、微笑ましい空気になつてゐる。たすけてくれよ

「せんせーい、授業始まるのが遅れますヨー。」

「うおっ、そうだな。授業始めるか。」

よつしゃああああ！ ナイスクラスメイト！ 心の友よ！

「では授業が終わつたらたっぷり話し合おうか」

「……………はい。」

うん現実には甘くなかつたよ。

「……………これで38回目の遅刻、だな。」

隣の席の男子が呆れたようにしてなにやらメモをしている。…………。ちよメモすんな！

（うー、はやく帰ってドラクエしたい。モンハンしたい。）

ああ、そういえば今日ドラクエ？の発売日じゃん。くうー学校休めばよかった！

授業そつちのけで私はノートに『かつたるい』と数回書いた。

たるい、樽井、たるい、たるい、たるい、たるい、たるい、たるい…………。樽井

さんて誰。

「ほう、俺の授業で落書きとは肝が据わってるな朝風」

……………汗だらだらー。

「あと解答の所にかつるたい、とは。ふふっ…………俺もなめられたもんだ。」

違うんだ先生。これは手が勝手に……

「これはもう授業どころじゃないな？　なあ皆、先生間違ってないよな？」

先生から発する謎のオーラ。威圧感が溢れてくる！

クラスメイト一同『は、はい！　先生は間違ってなど、いませせせんッ！！』

威圧感に怯えた生徒達はこくこくと高速で首が折れそうなくらい頷いた！

つてゆーか信じてたのにみんなから裏切られた！？

「ってなわけで、先生朝風とお話してくるわ」

「そ、そんなっ！　ほ、ほらみんなの授業でなくなるし…………」

クラスメイト一同『いつてらっしやいませ！　お元気で！！』

「んなっアホな！」

嘘だッ！嘘だ嘘だ嘘だ…………！

「それではみんな、各自自習！」

クラスメイト一同『はい！』

「嘘だああああ……………！！」

私は先生に引きづられたまま、教室とおさらばした。

クラスメイト『でもあれ自業自得だよな。』

そして何事も無かったかのようにみんな机に向かい自習を始めた。
……そんな平和な光景を見つめたまま、私は職員室へと導かれる。

それは、私が暮らす毎日の学校。

今ではドラクエ世界にいるから学校にもいけないけど、すこし寂しい。

毎日ドタバタはさすがの私でも嫌だけどね……。

今ではみんな、どうしているだろう。っつーか、家族にも会えないしこっちの世界もいいけど、でもやっぱり一回……あの世界に戻りたいな。

ああー、二つの世界を行き来できたらいいのに……！

「どうした？ 行くぞ沙耶ー！」

「あ、ごめんごめん。今行くよ」

今日も私は、戻る方法を探しながら仲間との『絆』を深める。

まだまだ道は長い。そしてこの夢のような現実の世界がいつか覚め
ると思っても

それでも私は今日も一日、仲間と一緒に歩きはじめる。

終わりの道へと、歩きはじめる。

祝10000アクセス突破！ 番外編『学校生活』（後書き）

ほんとはショートストーリーで色んな番外編も考えました。

沙耶えもんとか、ハチたろう（エイトをハチと読みももたろう風）

とか……

うん果てしなくドラクエ関係ねえ！

本編にも関係ない！

あとは飲み会だとか花火大会だとかみんなで海とか世界一周寄り道旅とか……。

あれ本編よりも番外編の方がアイデア出るんすけど。どーゆーこと？

それらも日を改めて考えていこうと思います。（私が書きたいだけ）

それでは今後ともこの小説ごときをよろしくお願い致します。

グッバイ！エブリワン！！

赤い人って血まみれのイメージがあるよね（前書き）

やっとパソコンが正気に戻った……。

赤い人って血まみれのイメージがあるよね

「で、あなたたちはどなたでしょうか。」

なんか偉いさんみたいなのこの部屋でマルチェロとかいう人と話している。

なんとこの人、この団長さんらしいのだ。そうかこの威厳っぽいのはそのせいかな。

「俺達旅の者です。ドルマゲスって奴を探しているんですが……。」
エイトはさつきとはまるで別人のように丁寧に話していた。……さすが

「ドルマゲスですか……。聞いたことがありませんね」
頭がM形のマルチェロさんは興味ないです感ぶんぶんで返事をしてきた。

「じゃあ、ここ宿ありますか」

「ここから先にドニという町があるのでそちらへ」
いやめっちゃ客室みたいなありませんでした？

「じゃあここには用無しですが！」

ヤンガスが急に仕切りだしたのでそれになんとか従った。
マルチェロさんもはよ帰れと言いたげだし……

「はよ帰れ」

……実際に言ってますから。

「じゃあそのドニとかいう町に行きましょうよ」

結局ここに来た意味なかったなあー。

「疲れたですが……はやくいきやしょう」

「私も休みたいよお……」

足がさつきからじんじん言ってるよ？

「……なんか俺、嫌な予感するんだよね。」

エイトだけ険しい顔のまま、私達はドニの町に向かった。

「……やっぱりですか。」

情報得るため酒場に來たけれど……ひどいものだった。

「へっ、俺と出会ったことを後悔するんだな」

「ぐっつう……」

「お、親方あー！」

なんかむさいおじさん達が恐らくイケメンであろう赤い人と喧嘩していた。

「うおおー！ 喧嘩でやんすか！ いいでがすね！」

こちらにもむさいおっさんが騒いでいた。……うんづるさい。

「こついうのには関わりたくないんだよなあ……」

「そうだね……」

私達は（ヤンガス以外）向ここのテーブルでのんきに注文をしていた。

「つていうか、うるさいわね……」

ゼシカがいまにもメラを放ちそうになっている。え、それってやばくない！？

「あーあ、ヤンガスが喧嘩に参加しちゃったなあ」

私達にも被害がきそうで怖い。

「エイトはいかないの？」

「めんどうだよ。大体、攻撃を食らう方が可哀想でしょ」

確かに、今の私達ならあんな庶民（笑）簡単に殺れるだろうね。

「うわー、さっきの人いすごと飛ばされたわー」

「わあー、あっちなんてファミコンらしきものが投げられたよー」

「ファミコンって何沙耶？」

そういえば、ソ○-と任○堂とはメーカーが違うからドラクエ？はプレステだし空気を読むならここは、プレステを投げるべきかもしれない。

え、どつちも投げんなって？

「ねえーファミコンて何ー？」

ゼシカがしつこく言うので教えてあげようか。

「時代の文化だよすごいんだよ古いけど奥深いんだよー」
適当に言っときやどうにでもなるさー

「へーっ！ 沙耶って意外と物知りなのねえ！」

「えっへん。そうだろう！ なんせ私は昔ゲームの神様と呼ばれて
いたからねえ！」

「すごいのね！ 憧れるうー」

「いやーそれほどでも」

うん照れるね。ここまで純粹だとなんでも信じるよ

「（ゼシカ……絶対騙されてるぞ……）」

うんなんかエイトがこっち見てる気がするけどここは無視だね。

「あ。もうほとんど片付けられてるぞ」

もう残っているのはヤングスとちよけてる感じの赤い人とむさいお
っさんだけだった。

あ、ヤングスもむさいおっさんか。

「なんか沙耶嬢ちゃんから酷いこと言われたような気が……」

「気のせいだよ。ほら、さっさと片付けてー」

「はあ……。つてか戦闘手伝ってはくれないんでがすね」

まあ、私達関係ないし？

「なああんたら……。一体誰なんだ？」

急に赤い人が今更聞いてきた。

「おいこらてめえ！ 話終わってねえぞ！」

やくざみたいなの……はつきり言っでカンタダみたいな人が言う。

けどみんな無視。無視なのだ。だつてうざいから。

「俺達はこの辺を旅してるんだ。あんたは？」

「俺か？ 俺はまあそこらの暇人みたいな感じか」

「おいお前らも無視すンじゃねえええよ!!」

「つまり、ニートなんだね。可哀想に……」

「いやちげえよ!? 言つとくけどちゃんとした仕事ある人だからね!?」

「ちょ、まさかの俺空気? 結構派手な服なのに目立たない感じ?」
まだ騒いでるよこのおっちゃん。

「いい加減てめえら、覚悟しやがれええ!!」

遂にキレだした。

あー、どうなつても知らないからねえー。

「おい! お前の相手は俺だぜ!」

これまたさつきまで空気だったヤンガスが急にかっこつけた。

まあまあ。斧なんて持つちゃって。

普通にあの死ねからね? どうみても。

「つてキャ!?!」

「にゃ!?!」

急に誰かに手を繋がれたと思うとまさかの初対面の赤い人に連れて行かれた!

「沙耶! ゼシカ!」

「あんたも来な! こっちだぜ!」

そのまま私達は酒場の裏口から脱出。そう、ヤンガスを置いて……。

赤い人って血まみれのイメージがあるよね（後書き）

「ちょこつと裏話コーナー！」

作者「お久しぶりですみなさん」

沙耶「……遅れすぎたよー」

沙介「俺ら忘れてる人いるんじゃないか？」

作者「……えへ。では新コーナー！」

沙耶「ウザイ上にさりげなく流した！」

作者「クイズでもしようかと思えます！」

沙介「あー、あれね。」

沙介「えーっと。今の沙耶のレベルは何レベルでしょうか？
だつて
よ」

作者「なんとなく考えてみてね！」

沙耶「答えは次の前書きで発表かあ……。」

それでは、また次回！

バカリスマ！（前書き）

視点切り替え使ってみた。

バカリスマ！

「ふいーここまで来れば巻き込まれることはないか」

「ちよつとあんた！
いつまで手繋いでるのよ！」

ゼシカがカンカンになって怒り出した。

はっ！　そういえば私もなんか手繋がれてる！

「ジ

心なしが、エイトがジロ目でこちらを見てる気がする……。

「まあまあ、お二人さんたち。これはお近付きのしるしとして」

チュ

$$\begin{array}{c} \neg \\ \bigcirc \\ \times \end{array} \quad \begin{array}{c} 2 \\ * \end{array} \quad \begin{array}{c} ! \\ ? \\ \perp \end{array}$$

あ、あああか、赤い人が！

わた、私の手の甲に！？

「ちょ、あんた沙耶になんてことして」

「ははは、こちらのお嬢さん方嫉妬かい？」

なんとむかつく態度でしょう。

赤い人はこんどはゼシカにも手の甲にキスをしましたとき。

「……おい、お前……」

エイトがこんどは怒りの形相で赤い人を睨んだ。

「ん？ 君もまさかとは思つたが……女の子？」

「お前一回死ねえええええええ！」

とうとうエイトが背中の武器を取り出し…… ってええ！？

「ちよ、エイトそれはさすがに！」

「いいえ、沙耶。ここは見守るべきだわ……！」
「はい！？ 何言ってるのゼシカ！？」
「この人死にかけないでしょ！？」
「こんなやろうは死ぬべきである！ でしょう？」
「……確かにそうだね」
「なんかあの赤い人もレイピア出してきたし。」

*

「さて、どうすつかない」
「ここまでできたからには本気でいくからな。保障はしてやらん」
「もう俺は限界だ。」
「このやろー沙耶にまで手え出してきて……」
「一応死ぬ前に名前を聞いてやろつ。俺はエイトだ」
「ずいぶんと余裕なこつた。……俺はクール」
「くるーる？」
「くるくるくるー？」
「……先制はもらったああああ……！」
「なにに……！」
「しまった！ 気をとられて先制をとられた！」
「卑怯だぞ！ えっと……クール？」
「ちがうわ！ クール！」
「甘いわああああ……！」
「なに……！」
「これぞ俺の実力！ 相手がつつこみを始めたら攻撃すべし！」
「ひ、卑怯だぞ！」
「どつちもどつちだ！」
「戦闘は頭の知恵で有利が決まる！」
「かえんぎりっ！」

「どうわぁ！ 俺の髪燃えるって！」
「しかしエイトはなにも聞かなかった！」
「ひでえ！」

俺の怒りはN O S T Pだぜ！ 明らかテンションおかしくなってます。

*

「なんか、二人結構楽しそうだね」
「まあノリノリでしょうね……」
どーもー、沙耶です。

いやぁ視点切り替えて初めて使ったけど難しいですねー。
え？ 過剰発言頼むからやめてって？
はっ！ そうだ私なに考えてるんだろう？
なぜか脳がキャッチして……

「はぁはぁー え、エイト強ええー」
「まあ一応旅してるしな」

どうやら結果はついたみたいだ。
エイトの勝ちってことかな？
「いてて……」

赤い人…… ククールだっけ？ ククールのポッケからなにか落ちた。
「なんか落としたぞ？」
どうやら指輪みたい。

「ああ、それやるわ。特に必要ねえーし」
「こんなの貰ってもねえー」

ゼシカが嫌そうな顔をしながら返そうとした。

「はっはっは！　もしかすると将来俺との結婚指輪になるかもしれないぜ？」

「なおさらいらんわー！！」

そりゃ怒るわな。ある意味セクハラ？

「まあまあーじゃ、俺は戻らなきゃいかんで」

妙に変な走り方でククールはどこかへと消えてしまった。

「……えっと、どうする？これ」

「返品しにいきましょう。こんなの迷惑だわ」

「……これマイエラの紋章だな。戻るか？」

どうやらマイエラ修道院の指輪らしい。

てことはククールは……

「ククールでもしかして、僧侶？」

「僧侶っていうかなんというか……まあそんな感じだろうな」

え、あんなのが僧侶？意外すぎて目が出るよ！

「あれが僧侶じゃ世の中腐るだろうね」

「……何気に酷いな沙耶」

そうかね？やっさしーい沙耶さんもそんなこと言われるもんかね。

「と・に・か・く！　これは返しにいきましょうー！」

「その前に宿屋に行きたいんだけど……」

エイトは戦ったばかりだもんね。

「じゃあ宿屋にいこーよ！」

「じゃあ明日にでも返しましょうか」

ふんふふーん

やっどやー！やっどやー！憩いの場ー！

「兄貴！　喧嘩終わりやしたよ！……ってあれ？」

しーん……

「えっとー……まさか？」

しーん……

「また置いてかれたああああ！！」

バカリスマ！（後書き）

ヤンガス……もうすぐ君は少し楽になるさ。
なぜなら……ククールという最高のいじり役がいるからだよ！！

お年寄りは大切に（前書き）

この前のクイズ……答えは？

沙耶「今11LVだよ」

意外と低いですね……低レベルクリアでも目指してるんですか

沙耶「……戦闘シーン入れないからだよ」

さ、さて！そろそろ本編どうぞ！

沙耶「逃げた！」

お年寄りは大切に

朝日も昇る、爽やかな朝がやってきた。
しかし、なぜ私たちはこちらしてげっそりとしているのか。
なぜ、テンションが低いのか。

理由は一つ……

「ゼシカ、沙耶。今すぐ俺の部屋へ来て。緊急会議だ」

「……うわぁ」

朝っぱらからエイトのお呼び出し。まじめ人間のエイトからしたらこれは珍しい事だ。

そして私たちもなんとなく勘付いていた。

「さて、大変なことが起こった」

渋々エイトの部屋へ行き、なんとなく正座してみる。

正座は日本人の正しい座り方だからねっ！

「その内容だが　　「ぐがぁぁぁー」……ッ」

ヤンガス…… お前の空気読めなさは世界に通用するよ。

「すまんヤンガス。君には安らかに眠ってもらっ」

そう言ってエイトは拳を構え

「ぶがぁあッ!？」

ヤンガスのお腹へとダイレクトアタックした。合掌。

「ぶぎ……ZZZZ」

それでも眠れる君は超人だよ。

「これは置いという。会議を始める」

「いやエイト。置いといたらまずいでしょう」

ゼシカによる冷静なつつこみ。

「ヤンガス……君のことは忘れないよ。今日の8時まで多分」

「いや沙耶。その涙は明らか偽者でしょう？」

ヤンガスよ。君の永遠なる眠りを見守ってあげよう。……だるいからやっぱパス。

「大丈夫だ。彼を殺さぬよう死にたいくらいの痛みを感じさせて、その痛みは永遠に続き夢の中もがき続けるだけだから」

「むしろ殺してあげた方が！ そんな思いするくらいなら殺した方が楽でしょう！？」

「駄目だよゼシカ。仲間の思いを一番に考えてあげないと」

「その発言全部、貴方に返すわよ！」
なんか話が一向に進まないね。

そうだ。この隙にここから逃げ出して地獄会議を抜け出そう！

うむ、我ながら完璧な発想！ では……サラバじゃ！

「どこに行こうとしているのかな？ かな？」

「え、えいとサン……」

沙耶の野望、完！ 次回もお楽しみに！

「さあ、話が進まないからさっさと会議するぞ！」

「いや、進まないのはエイトのせいかと」

「ちなみに沙耶は、今日は朝ごはん抜きだ！」

「ごめんなさいそれは勘弁してください」

ジャンピング土下座を沙耶は習得した！ しかしあまりいらなかった！

「大変なこととは、陛下のことだ」

「最近出てないもんねえ。そりゃあ大変なことだ」

「沙耶は少し自重しなさい」

「……はい」

「で、そのトロデ王様に昨晚ご飯を持っていくのを忘れてたと」
「その通りだ、ゼシカ」

……やっぱりね。

私たちも今日の朝氣づいたんだよねえ。

「あのわがまま王様が怒らない以外はあり得ないわね」

「ただでさえ、出番無いのにねえ」

「だからどうしたものか……。困ったなあ」

ちよつとシュミレーションしてみる。もやもやー

『わしが村の外で腹を空かせながらお前たちは……おいしい飯を食
つて……………』

こんな感じに拗ねるだろうなあ。我ながらそっくりだよ。

「では、誰が謝りに行くか決めよう」

「いやいや、ここはエイトが」

「いえいえ、ここはリーダーが」

「そうか。君たちはご飯がいらないと言いたいんだな」

「「ごめんなさい」「」

「よろしい」

この人、めっちゃ脅迫してる。

まあ食事はエイト担当だからね。

「ここは平等にジャンケンで決めよう」

「それが一番だね……………」

「絶対負けないわ!」

周りに『ゴゴゴ……』もしくは『ざわざわ……』という擬音が見えた。

そついうのはカ○ジさんに任せよう

「ジューンケーン ホイツ！」

「……うつ」

エイトがチヨキ

ゼシカもチヨキ

私は……パーだった……………。

「弱っ……………」

「グサツ！」

なんか私の胸に矢刺さってない？

痛いんですけど。

「では罰として沙耶が謝る係りで」

「うう……………やだよう……………」

「どんまい沙耶。まあ頑張りなさい」

皆慰めてくれた。しかし代わってあげると言う人はいなかった。

「行つてらつしゃい……………」

「逝つてらつしゃいだなんてひどいよう……………」

「いやそつちじゃないから」

私にとつたらそれくらいなんですよおう……………鬱だあ……………。

「じゃ、お元気で」

二人はもう旅の準備をしている。ひどい！

それでも仕方なく謝りに行く。まあ、お昼無しはキツイなあ。

「でも……………絶対怒られるわあ……………」

むしろ怒られない方がどうかしてる。

「うわあ……………いるよ、いますよ。悪魔のシャイターンが」

緑色の奇妙な生物。その後姿を見るだけで精一杯だった。

「どうしょ……………でも負けちゃったし……………ここはいつそのことや

ンガスに……」

ヤンガスが気の毒すぎる。どれだけ彼は仲間にくき使われてるのだ。

……まあ、その中に自分もいるんすけどね。はは、あはは……

「ええーいつ！ 儘ままよ！」

そのまま私は悪魔トロデのもとへと駆け出した。

「たのもあー！」

「うわ！？ なんじゃいきなり！？」

さあ、このまま突っ走れば怖いもの無しだ！

「ところで最近の3Dってすごいよねー映画はもちろんテレビやDSまで3Dになっちゃってさあー大迫 力でお腹いっぱいって感じでえーあれだけでご飯3杯はいけるねうんまじでもそのせいで視力がちよー下がったんだけどどう思う？ そこんとこどうかな？」

「とりあえず落ち着け」

ぜえ……ぜえ……。息継ぎ無しでここまで言えるってすごくね？
これだったらコーラ一気飲みしてげっぷする前に都道府県言えるんじゃない？

あ、ごめん私地理弱いわ。

「一体どうしたらそんなことになったのじゃ……沙耶……」

王様が憐れといった目で見てきた。

「ところで昨日……眠れました？」

「いきなりんじゃないやその話題！？ 前置きはなんだったんだ！」

「そうですね……眠れ、なかつたんですね……」

「わしまだ何も言つとらん！」

「そんな貴方に睡眠薬 一瓶くらい飲めば効きますよ」

「殺す気！？ わしを殺す気なのか！？」

「やだなあ王様ったら。そんなに喜んじやって」

「どう見たらそうなる！？ お前老人虐めて楽しいのか！？」

わ、さすがに疲れてきた……。喉が痛い……。

15分間お待ちください……。

「昨夜？ 飯ならヤンガスが持ってきたぞ？」

「あ、そうなんでしたか。よかったぁー」

うむ、まさか彼が役に立つとは（ひでえ）

「まあ…… 哀愁漂っていたんじゃが……」

置いて帰っちゃったからなあ。うーん、憐れ。

「よかったー、すっかり忘れてたよ……。さっきまでの緊張はなんだったんだろう？」

「忘れてた……のか」

「うんうん、エイトもゼシカもだよ？ でもまあ結果オーライってわけで」

「ふーん、それはよかったのお……？」

危ない沙耶！ 後ろ後ろ！……しかしそんなことを言ってくれる人はおらず。

「さて、じゃあ私も宿に」

この瞬間、私は後悔の波へとビククウェーブする。

「全員呼んでこおおおお
いいいい！！」

……その後どうなったかって？ まあ、想像はつくんじゃない？

お年寄りは大切に（後書き）

今回読みづらかったと思います。
流し読み程度で十分だね。

……べ、べつに隅々まで読んで欲しいわけじゃないんだからねっ！
なぜにツンデレ？

特別コラボ回！〜異世界の勇者と異世界の一般人〜（前書き）

なんと今回、御徒さんとのコラボです。

遅れてしまいましたが、なんとか完成いたしました。

エイトイラストについては……もうちょい待ってと、いうわけで本編コラボをどうぞっ！

特別コラボ回！異世界の勇者と異世界の一般人！

……突然だけど、沙耶がいなくなった。

いやまあ、普通に夜の散歩とかかもしれないが、何も言わずに出て行くのは珍しい。

ということで、エイトこと、俺が今探しに行っている。

なにもなければいいのだが……。

「うー、さぶい」

夜というのはどうしてこんなにも寒いのだろう。

今にも鳥肌が怖いくらいに立っている。

なのにペンギンさんはどうして寒くないのかなあ？

というか、なんで人間に鳥肌というものがあるのかね。

「うーん、ミステリー……」

さて、どうして私がこんな夜に外にいるのかというと。

あれだよあれ、導かれたんだよ。ワト○ン君。

実は導かれし勇者なのだよ私は。いや、ブロッコリーの話じゃなくですねぇ……。

「でもさすがに何も言わなかったのはまずいかなあ。帰ったらエイトカンカンだろうなあ」

いつもながらのこと、だけどね。

エイトはあれで心配性ですから……。

この前火傷したくらいで冷やすためにヒヤダルコ使える敵探して

ただよ？

序盤でヒヤダルコ使えるどころか……私、凍って死ぬわ。

「この辺だったかなあ多分。さっきの異様な光は」

異様な光……それはさっき私が食事の後部屋に戻ろうとしてたら、急に青白い光が眩しく輝いて。

気になったんでその場所に行こうとしてるところ。

「恐らく、空からなにか降ってきたとみる！」

よく漫画とかアニメとかでありそうなパターン……ほら、たとえばの話ド○ゴンボ○ルが落ちてきたりとか。そんなの見つけたら残りも探すはめに……いや、同じドラゴンでも全然違うからね！？

うわー、一人脳内ボケツツコミは切な過ぎる……。

かといって声に出したら迷惑だし、なにより怪しすぎる。

「うーさっきよりましとはいえ、青いのが近づいてきたなあ」

そういえば結構すごい光なのにほかの人は気づかなかったのかな？多分みんな老眼なんだね。そういうことにしよう。

「おーい、沙耶！ここにいたのかー！」

「あれ、エイト？」

なんとエイトがやってきた。

ほらやっぱ心配だったんだろうなあ。

まあ嬉しいけど……なんかホント、エイトってお母さんみたい。

「心配したよ？急にいなくなるもんだから……」

「えへへ、ごめんごめん。ちょっとあれが気になって」

「……あれか？ってまぶしっ！？」

驚いた声を出すエイト。その視線の先はもちろん私が追っていたものだ。

「うん、なんだろうねあれ」

「あれは……旅の扉か？」

「旅の扉ですとっ!？」

「声大きいぞー沙耶」

「あ、ご、ごめん」

思わず大声をあげてしまった。

……だって旅の扉だよ？

あのドラクエおなじみのいかにも酔いそうなあれだよ？

そりゃーあ沙耶さんはドラクエ好きだもの。反応するよ。

「へえ……本では見てたが……ほんとにあるんだな」

「でもなんで急にこんなところに？」

「さあ……？」

ふむ。不可思議なこともあるもんだ。

まあ、もともと日本人がドラクエ体験してる時点で不可思議体験だけだね。

「入ってみる？」

「どうぞどうぞー」

「一人でっ!？ 沙耶は行かないのか!？」

「いやあ……だって、ねえ? (遠い目)」

「めんどっちいし」

「じゃあわざわざなんでここまで来たの」

「うぐっ」

「あーあ、明日のご飯はシチューにしようと思ったのになあー。これじゃあ明日かにスープになっちゃうなあー」

「っ!？ か、かにい!？」

ひいー!あの見た目のおっそろしいーかにさんをかい!?

私はかには好きだけど、容姿がもうダメで……ほら、蜘蛛みたいな……うう思い出したくない!

「いやー明日楽しみだなあかにスープ。沙耶食べようとしなないし」

「行きます行きますっ! 行けばいいんでしょ!？」

「ん、よろしい」

セセセ、セーフ……。危ない危ない。

というか、エイト食べ物で釣りすぎだつて。

「ゼシカとヤングスには……まあいいかわなくても」

「帰れなかったらどーすんの？」

「まあそんな時は臨機応変に」

「うわー、心配になってきた……」。

「じゃあ、行ってみよう」

「……本当に行くんだ……やっぱりやめ」

「かにスープ」

「わあー！ 楽しみだなあ初ワープ！ どこに行くのかなあー！（超棒読み）」

冷や汗が額をつらりと過^よぎる。

私は完全にエイトの手玉にとられていたのだ……！

「よしっ、じゃあ行くぞー！」

「は、はい………はあー」

そうだ。

このままエイトを押してずらかればいいんじゃないか。
エイトのことだから死にはしないだろう。多分。

「そうはせんツ！」

「何い！ ってちょエイトさあん！？ おおお、押したらああ………！？」

「そのままダイビングだつ！ そおーいつ！」

「うにゃあああああ ！？」

そして、私たちは渦の中へと取り込まれた。

……しかし。

「……ここは、トラペッタ地方か？」

「よかった……身近なところで」

残念そうな顔をするエイト。

この人は……ほんと、好奇心満載なんだから……。はう……。

「でもさっきまで夜だったんじゃない……」

「確かに、おかしいね……」

今はどうやら昼っぽい感じ。

なぜならばこんなにも太陽が輝いているから。

「とりあえずルーラしてみる。つかまってて」

エイトはルーラを唱えてみる……も。

「何も起こらないね……」

「ここの移動候補が全く無いな。どういうことだろ……」

私はエイトの服を掴みながら考えてみる。

ルーラができない場合、MPがないか移動するところがないかの

二つ。

エイトのMPは満タン。

そしてさっきはドニの町の宿場にいたはずだからおかしい。

「魔法が失敗したとか？」

「まあ、それぐらいだな。とりあえずトラペッタ目指そう」

「そだね」

そうして私達はトラペッタに行くことにした。

「やっぱりこの辺の魔物は弱いな」

今のところ全部おどして進んでる。

このシステム楽だわー。

「トラペッタってどこだっけエイト」

「あー、その辺じゃない？」

なんて適当な返事なのだ。

そつえば、エイトは方向音痴だった。

「……今すごい不安という気持ちに溺れた気が」

「なに言ってるんだ沙耶。俺が迷うわけないだろう？」

過去に何度も迷ってたから不安なんですよ。ええ。

「恐らくタッペラトはもう少しだ！」

「トラペットならともかく、その間違いはあり得ないよね」
「なんか器用な間違いをしていた。」

「反対から読んだんだね……。」

「んー、こんな道来たことないような気がするんだよねえ」
「結構この辺は行ったことあったはずんだけど……うーん。」

「へー、こんな道もあるのかぁ……。」

「あーこれ以上エイトに興味心を持たせたら大変なことになるんじゃない……。」

「早く帰りたいなあ……。歩き疲れたよ……。」

「ほらほら、運動が足りないぞ？ もう少し頑張らなきゃ」

「ううー……。」

「なんかもう暑いし……。」

「砂漠を歩いてる気分だよ。」

「あそこに誰がいるぞ？ 道聞いてみようか」

「……どこにいるの！？」

「目を凝らして見た……が、人姿は見当たらない。」

「見えないの？ ほら、あそこ」

「よくよく、見てみれば……豆粒みたいなのがあった。」

「え、あれ人？」

「俺、目良いから。恐らく人だな」

「人、となれば……GO！ 走るんだ！」

「行動はやっ！？ てか足痛かったんじゃないか！？」

後ろのエイトのツッコミを軽くスルーしながら豆粒へと向かった。

「つて止まらない!？」

体がすぐに言うこと利かなかった。

豆粒は次第に大きくなっていき、近い距離までになっている。

「すいませ

んっ！ 危ないですからどいてええええ！」

「ふへえ!？」

ギリギリなところで足を上手に滑らせスライティングの立ったままバージョンになり綺麗に止まった。

「おおー!」

そしてさっきまで豆粒だった人からの拍手。うん良い感じ！

「ふうー、ギネスもびつくりする見事なプレーだようんうん」

自分で自分をほめる。それはちよつと嫌だったがそれくらい気持ちよかった。

「大丈夫ですか？」

「へ？ あ、ごめんなさい。急に飛び出しちゃって」

「平気ですよ。えっと……」

「沙耶っていいいます。１７歳のオタ……じゃなくて、変わった人です」

なんて自己紹介なんだこれ。恥ずかしくなってきた……。

「ふふっ、私はアスナ。同じ１７ですよ」

「あ、そうなんだ。じゃあ普通に喋るね」

「うん、いいよ よろしくね沙耶!」

なんていい子なんだ。沙耶さんジーンとしてきちゃうよ。

「ちよ、この人いきなり出てきてびつくりするんですケド!」

……うん、なんかサンディっぽいのが聞こえる。

「ちよつとサンディ……。あ、ごめん今の独り言だからっ!」

「へ？ あ、うんそりゃそうだ」

「……？」

「……なんで？の世界に？の人がいるのか……すごい気になったけど。」

「今はとりあえず、そっとしておこう……。」

「おーい、アスナあ。置いてっちやうよあ？」

「アスナ嬢ちゃん。道草くってないでいくでがすよ」

「あ、うんちよつと待って！」

「……ナンデスト？」

「あれどうしたの沙耶？」

「いつの間にか私は頭のこめかみを抑えていた。それもそうだ。」

「だって……ここに、エイトとヤンガスが、いるのだから。」

「はあはあ、や、やっとなついた沙耶……」

「ここで二人目のエイトが登場。うんちヨット待て」

「え、エイトが二人？」

「あ、兄貴が二人？」

「「あれ、俺（僕）が二人いる！？」」

「……い、一体どーいうこと……」

「なんか分からないけど分からないことになった。」

「えっと……とりあえず、乙？」

「というか、ヤンガスここになんで……！？」

「へっ？ あっしは兄貴はともかく、その嬢ちゃんとははじめましてがすよ」

「なにー！ 貴様は私を忘れたというのかあー！」

「えええ！？ 忘れたもなにも、知らないでがすっ！」

「ど、どうなってるの？」

「さあ…… 多分あっちの僕とは別人かな？」

「なんか、ややこしいことに……。」

「別世界の俺とか？」

えーと、俺エイトが喋ったのかな？ 分かりづらいなあもう。

「パラレルワールド的な？」

「だからルーラできなかったのか……」

「やっかいなことになってしまった。」

まさか別世界に行くなんて…… もしかして私は世界を懸ける少女なのじゃないかな？

別世界体験2回目というわけだし。

「あのー、なんか分からないけど一応自己紹介でもする？」

アスナが口を開いた。

「うんそうだね。僕ともう一人の僕の正体分からないし」

「じゃあ、私から言うね。私はフィ……ではなくて、アスナっていうの。よろしくね！」

「僕はエイト。トロデーンの兵士をやっているんだ」

「あつしはヤングガスでがす！」

「やっぱり二人とも同じ名前なんだね……」

「ご親切にどうも。俺はエイト。よろしくな」

「私は朝風……ではなく、沙耶です。よろしくねー！」

さて、一通り自己紹介が終わったところで。

「魔物……だね」

「魔物…… 来てるね」

「魔物でがす！」

「魔物（笑）」

「空気読めない魔物だなおい」

はーい、強制バトル開始でーすっ！

「スライムとリップスくらいなら、なんとかかなんたる」

俺エイトが剣を取り出し、構えをとる。

「（あの構え方……少なくとも、素人ではないね）」

僕エイトも剣を取り出し………周りの空気が変わった………気がした。

「さて、殺ろうか」

「……あえて、無視しておこう」

「……らじゃー」

アスナとヤングスは慣れている、といった感じでもう戦っている。

「すまないな魔物よ。俺は、もう止まりはしないぞっ！」

「「やっぱりおかしいよう

！！」」

「ッ！？」

見事に俺エイトと意見が統一し、見事にはもった。

「と、とりあえず沙耶と俺エイト！ 戦おう！」

しかしアスナの一言で我に返る。

「そ、そうだな。いくぞ、沙耶」

「おーけおーけえー！」

得意の槍で……スライム刺し！

うえ、えぐっ！？ スライム刺し、えぐっ！？

刺さってるのにスライムが笑ってるのが怖いんですけど！

「とりあえず、これで最後かね」

僕（俺？）エイトが剣をしまった。

なんだろう、一瞬ホツとたような。

「なかなかやるなあー、もう一人の俺」

「そんなことないよ。もう一人の僕こそ、達人ほどじゃないか」
いつの間にか二人は溶け込んでいた。

「けど、すごいね。二重人格ってやつ？」

アスナになんとか話しかけてみる。

まあ、さっきのあれは衝撃的だったし。

「あはは……、私も最初びっくりしたんだよ」

「そうだッ！」

私が無んとか閃いて行ってみる。

これはなかなかいい閃きッ！ピラ○キーノに出れるくらいッ！

「二人とも、勝負しちゃえッ！」

「で、こんなことになった訳ね」

どうも、俺エイトです。

なんか知らないけど、あっちのエイトと戦うこととなりました。

と、いうか沙耶はいきなりだから困る。

ま、慣れたけど。

「じゃ、お手柔らかに……っ」と

「うん、よろしくね」

まあさっきのは驚いたけど……でもまあレベル差もあるだろうし、勝つだろう。

「大人気ないかもしれないけど真剣でいかせてもらっよ」

「大丈夫、僕も冒険者だし」

そういつて、あっちのエイトは剣を出した。

……なんだろうな、この一瞬で分かる空気の違いは。

「それではあー」

「レディーツゴォー！」

沙耶とアスナが元氣よく勝負の開始を告げる。

この瞬間には俺は動いていた。もちろん、あっちもだが。

「それでは遠慮なく……殺らせてもらう」

「いや殺っちゃっためだからッ！ 言っとくけど俺人間だからッ！」

容赦ないな……でも、剣の腕は確かだ。

「くっ！」

交わっていた剣をはじきさせ、一定の距離をとる。

そして相手がこちらに向かうのを計らい……

「かえんぎりっ！！」

「っ！？」

ちっ、避けられたか。

「なかなかやるなもう一人の俺」

「ふっ、そっちこそ。面白い戦いになりそうだ」

「あんましよ見してっとかけんぞ？」

「なぬっ！？」

僕エイトの足をひっかけさせ、転ばす。

「いいか、剣ばかり見ていちゃだめだ。全身で相手の動きを感じ、隙あれば攻撃をしかける」

これは兵士をやっている時に嫌ほど聞かされたことだ。

まさかこうして役に立つとは。

「すごい……これは……、なかなかのもんだ」

僕エイトは本当に楽しそうな顔を浮かべた。

それに俺はにこつと笑顔を返してみる。

「じゃ、こっから本番なっ！」

「さっきはやられたが……次はどうなるか分からないぞ！」

久々にいい戦いになりそうだ。

「……で、さあアスナ」

「んっ？ どうしたの沙耶」

退屈にしていた私はエイト達の戦いをぼーっと見ていた。

「言い出したのは私だけど……なんかつまらないね」

「うん……、まあお互いなかなかやめないし」

そう、あれから一時間ほど経っているのだ。

それなのにあの二人はやめようともしない。

「ちよつと世間話でもしてようか」

と、いうことで。

この世界の話とか、私の正体とか、アスナのことだとか、色々話をした。

「お互い、異世界同士なんだね」

「その中でも私はただの一般人だけど」

だってアスナは？の主人公らしいんだよ、話を聞いてると。

ここでも不思議なこと起こるもんだなあ……。

「にしてもさあ」

「……うん」

……ずっと気になってたんだけど。

「ヤングス……どうしたのさ」

「……うう、アスナ嬢ちゃん……さっきからあっしの出番が」

「そういう運命さだめなんだよ。ごめんね」

「こっちでもヤングスの扱いはひどいか……」

仕方ないことなのかもしれない、うん。

「あ、やつと終わった？」

エイト達が帰ってきた。どうやら結果は引き分けみたいだけど。

「うわっ！ なにその剣!？」

アスナが驚いた声を出すので思わずエイト達の剣をしてみる。

……まっふたつになっていた。

「どうやったら、そんなことに……」

呆れた声を出す私とアスナ。

「ただ夢中だったのか、まるで二人は遊び終わって帰ってきた泥だらけの少年のように汚れていた。」

「いやー、楽しかった。久しぶりだよこんなに夢中になったの」

「僕こそ、ありがとう。とても参考になる剣裁きだった」

二人は共に握手を交わした。すばらしき、友情。

「お腹も減ったことだし、料理でも作るか」

「やったあー！ おかんエイトの究極手料理いー！」

「沙耶はドッグフードでいいな？」

「ごめんなさい」

土下座……まではできないけど、頭を下げた。

「ふふっ、沙耶とエイト仲良しなんだね」

「アスナと僕エイトも仲良しじゃん？」

「はは、結局は僕達似たもの同士なのかもね」

「あはははは、あはははは、と楽しそうな笑いを続ける皆さん。」

「ふっ……やっぱりあっしは……」

「……わあ　　っ！？ ごめんごめん！」「……」

それでも、楽しい時間が過ぎてくわけ。

「うー、帰りたくないよお」

突然私達の前に現れた、旅の扉。

恐らくこれを潜れば帰れるだろう。

「仕方ないよ沙耶。じゃあ、皆、俺達はこれで」

「うん……ありがとう。エイト、沙耶……」

「楽しかったよ。料理もとてもおいしかった」

「うっ……兄貴、沙耶嬢ちゃん。また来てほしいです」

少し、後残りのあるまま。

「それじゃあみんな、ありがとうー！」
元の世界へと、帰還します。

この後、このことをゼシカとヤンガスに話したら怒られた。
心配かけたことと、二人だけ行ったことも含めて。

……結論、ゼシカ様こえー！。

特別コラボ回！〜異世界の勇者と異世界の一般人〜（後書き）

ふいー、緊張しますなあこりゃあ。

と、いうわけで今回御徒さんの作品『ドラゴンクエスト？』と異世界の勇者の生きる世界』とのコラボでした。

あちらではは細かな設定とギャグ要素の入った素敵な作品が投稿されております！

ぜひ、あちらの方も読んでみてください！

直接リンクは貼れないので、URLコピーだけでもさせていただきます。

<http://ncode.syosetu.com/n4173u/>

それでは皆さん、次の回でお会いしましょう！
しーゆーねくすとばーいー！

ククールってパッケージにいたっけ？（前書き）

久しぶりです！

やばいもう、8のシナリオ忘れてきてしまった！

……もう一度プレイし直すかな？

でもドラクエって結構時間かかるんだよね……。

クールってパツケージにいたっけ？

「でもまた、マイエラ修道院に戻るの……？」

正直乗り気じゃないんだよね、またあそこ戻るの。
めんどくさいし。

「ゼシカが言ってるんだから仕方ないじゃないか……」

「あつしは先に進むたいですよ」

文句ブーブー言う私達だったけどそれをゼシカにはつきり伝える
のは無理だった。

なぜなら……。

「……………」

ゼシカの周りが、恐いから……。

「なんかいつの間にかリーダー代わってるよねエイト」

「……こんなつもりじゃなかったのに」

あ、もう建物が見えてきた。

「あの……ええと……どちら様で？」

「そんなのいいから早くクールっていうバカを出しなさいよ！」

「ひい！ ごめんなさいごめんなさい！ なんか分からないけど
ごめんなさい！」

「ちょゼシカ！？ まずは落ち着こうよ！」

だめだゼシカがなんか借金取りみたいになってる！

「えーと、僕達はクールさんに渡したいものがありまして……」
きた！ エイトの仕事スマイル干涉！

「そつよ！ だからそこどきなさい！」

「ぶち壊した！」

「わわわ分かりました。どうぞ中へッ！」
すごい恐がつてるよこの人。

とりあえず私達は一般人は入れない場所に入った。

「……なんか悪い予感がするな」

「……エイト？ ……足にスライムベスついてるよ」

「ええええ！？ なぜ！？」

えぐい。スライムベスは踏まれていた。

つか、踏んだまま歩いてたのかエイトさん。

「ククールっていう奴でしたっけ？ どこにいるんですがすかね？」

「とりあえず、探そう。でもその前に」

エイトがとりあえず歩きだす。どこに向かうのかって？もちろん……。

「壺……割るぞ」

「やっぱり……」

もう恒例になってるから慣れてきたよ。

「ほー、地下もあるんだなー」

「うわー、暑そう……」

一時間ほど経って、もうこの建物にも飽きてきた。

「入ってみるがすよー！」

分かってるわい。

「……牢獄かここ」

「そんな感じだね……」

静かでなにもない部屋がたくさんあった。

こういう静かなところはあまり好きじゃないんだよね……。誰がいるぞ」

「なんかこの感じメタ〇ギアみたいだね」

「黙ろうか沙耶」

「はい……」

分かりましたよ、沙耶さんはもうダンボールの中入っておきますよぶんぶん。

ってダンボールなんか持つてきてねーよ。

「ちょ、ちょっとしゃがんでみんな!」

おうおう、エイトさん。盗み聞きですかい。

「あ、クツクルーじゃん」

「（静かに喋ってくれ沙耶!）」

「（はい）」

「またお前かドニで喧嘩を起こしたという奴は」

「あーあーそうですよはいはい」

「なんだその態度は! 反省してるのか!」

「シテマスヨー」

「（あれ、マルチヨロさんじゃない?）」

「（あー……あのイヤミ野郎ね）」

「（あの二人こんなところでなにをしているのかしら?）」

「（まさか……ボーイズラブ的なこと?）」

「（そ、それは無いと信じたい）」

「（兄貴……。もうこの部屋から出やしようよ……）」

「（いやでも、来たからには後戻りはちよつと……）」

「まったく……お前のせいで修道院は悪い噂ばかりだ」

「それはそれは。いつも大変だねえお兄さん」

「お前など弟ではない!」

「そうカツカせずに。あんまし怒りすぎるとMが広がるぞ?」

「よけいな世話だッ!」

「（あの二人って兄弟だったのかな……）」

「（たしかに似てる気もするわね）」

「罰としてお前は、外出することを禁する。いいか、ずっと修道院

にいとけ」

「えええ」

「文句あるなら追い出すぞ」

「はいはい、分かりましたよ団長さん」

「……ふん」

「（やば！ 二人がこっち来るぞ！）」

「……ん？ だれかいるのか？」

「（どうしよう沙耶！）」

「（任せんしゃい！）」

沙耶さん奥義を見せてやるわい！

「によりーん」

「なんだ猫か。どうする兄貴ー」

「ふん、猫など放っておけ。というか私はお前の兄じゃない」

「「（（アホかこいつら！）（）（）（）」」」

ふー、どこか行つたぞ……。

「誰もいなくなった……よしセーフ！」

「あんなのでいけるもんなんだな……」

「あー、どきどきした……」

「なんとかセーフがすね……」

「やっぱ私、モノマネの才能あるね」

「「絶対無理だと思う」「」」

「全員否定っ！？」

ひどい……結構モノマネ自信あつたのに。
今ならドラ○もんとかも出来るんだぞ！

「よし。さっさとクールンとこ行って指輪返しにいこう」

「そういえばそんな設定あったね」

「忘れてたのかい！」

「いやだって……ねえ？」

クックルに会ったことも正直忘れてたよ。

「こんなところはもうおさらばですがよ……」

「たしかに……牢獄みたいのは嫌だわ」

階段を登って私達はククールを再び探しに行く。

「つていつても、すぐいたね。おいクク山ー！」

「……クク山？　つてエイト達じゃないか」

ギザ男発見！　ようやく先に進める！

「……………」

「どうしたのエイト？」

今日はなんかエイトが難しい顔をするのが多いなあー。

「なんか、やつぱり嫌な予感がするぞ……」

「……エイトもか？　実は俺もするんだよな」

「クク山も？」

「クク山はやめてくれ」

「そんなことよりも！」

ゼシカが一喝する。出ましたオカン！

「あんたからもらったこの指輪いらないから返しにきたわよ！」

「ええ？　ああ、それか！　……その手があったか……」

「は？」

なにいつてんのこいつ？　みたいな顔をゼシカがした。

「さつきからまがまがしい嫌な感じがするんだ」

「さいでつか」

だめだゼシカが関西人みたいな感じになってるよ……。

「院長の身が危険だ……。見てきてくれないか……？」

「とはいっても、なんであつし達が……」

「ドルマゲスのことだな」

急にエイトが喋った。

……ドルドルが来ているのか!?

「どういうことエイト!？」

「さっき聞き込みをしていたら誰かが言っていた。道化師……ピエ口のような奴が、ここの院長の部屋に入ってたってな」

「……っ! ドルマゲスが……ここに……!」

ゼシカも緊張したような顔つきになる。

ヤンガスも同じ……私はあんまし、驚いてはいないけどね。

「行こう。その院長さんの部屋に」

「うん!」

「でも待て」

ククールが私達を遮る。

「ここからじゃ院長の部屋に行けないぜ」

「どういうこと?」

いやあそこにそれっぽい扉ありますやん?

「あそこはこの僧侶達が見張っている。あれじゃあ中に入ること
は無理だ」

「じゃあ、どうやって行くの!？」

「その指輪だ」

「へ?」

ククールがゼシカの持つている指輪を指す。

「マイエラ修道院から川沿いに歩いていくと、古い壊れた建物があるんだ。あそこからその指輪で入ることができる」

「遠回りするのか……」

う、嫌だなそれは……。

「仕方ないだろ? それしか方法はない」

「ククールは行かないの?」

私はクク山に聞く。そして念じる。『お前も行けや!』と……。

「ふっ、生憎俺はここから離れてはいけない重要な役割があつてな……。
すまない」

ああ、そういえばマルチョロさんからなんか言われてたね。

「ドルマゲスの奴がいるとするなら、急ぐでがすよ！」

「ああ。オディオ院長さんも危ない」

「オディオさんて誰？」

「え……この院長さんの名前らしいけど……」

なんか知らない間にエイトは聞き込みばっちしだったんだね。さすがー。

「よし！　じゃあ行つてこよう！」

「頼んだ。……院長を助けてくれ」

「ま、仕方ないわね」

「いくでガンス！」

「……疲れたなあ。明日にしてほしいなあ」

私達はやる気満々（一名除く）で外に出た。

クールってパッケージにいたっけ？（後書き）

クールってパッケージにいましたっけ？

裏面ではひっそりと居ただけと表では3人（+二匹）のみ……。

トロデと姫様もいたのにクールだけいないぞw

敵キャラのクールの像だけ一番経験値低いし……

公式でもこんな扱いかクールww

おばけ怖いまじ怖いまじ怖い(前書き)

お久しぶりです。いや、本当に……。

長くなってしまってて申し訳ございませんでした。

それでも久しぶりっ！と見てくれる方はマジで神です……ははーっ
！

おばけ怖いまじ怖いまじ怖い

クールというバカでギザでおまけにチャラ男に頼まれて一時間ほどが経った。

「ここら辺の敵、意外と強いな」

エイトは額の汗を拭い、剣をしまう。

「たしかに、辛くなってきたわね」

ゼシカも疲れの様子がよく現れていた。

「でもこういうとこの方がレベル上げしやすいじゃん。今日はレベル上げしようよ」

正直、レベルが上がってないんだよね。

槍とかも使い慣れてはいるけれども、新しい技覚えたいじゃん？

「沙耶嬢ちゃん……。今はオディロ院長のとこに行くのが目的ですよ」

ヤンガスが少々呆れたように私に向かって言った。

「……そういえばそうでしたね、オディちゃんのとこに行くんでしたね。」

旧修道院の跡地とやらを……探した。が、全く見つからない。

え、まさかのここで詰まった感じ？

「エイト……ここ、どこかな？」

「……多分もうすぐ着くって」

いやいやいや、エイトさん！？内心凄く焦ってますよねえ！？

このままだと日が暮れちゃうぜ て感づいてますよね！？

「エイト！ いったいどこに向かっているのよ！」

「め、目の前にお城があるでがんす……」
後ろからギヤーギヤーと文句言われるエイト。
彼の方向おんちはもはやプロ級であった。
そして隣にあった看板に書かれていた文字……それは、『このまま行くとアスカンタ城』であった。

「ほら、皆レベルが上がって良かったな……なんちて」
後ろに振り向いたエイトは気まずそうに……そして、爽やかに告げる。

「……よくねえわ!!」「……」
「ご、ごめんって! 悪かったよ! さすがにこれは方向おんちすぎたよ!」

結局、修道院までワープしーから搜索を始めた私達であった。

「さて、気を取り直して……旧修道院に到着!」
「マイエラのすぐそこにあつたじゃん!」
みんなの顔には疲労、疲労、疲労……。
「お前達、ここまで来るのに時間かかりすぎじゃ!」
久々に発言したトロデの王様だ。なつかしい。
「で、これどうやって入るんだがすか?」

「この指輪をここにはめたらいいんじゃないかしら？」

「なんだかんだ言っつてずっと持ってたゼシカちゃんが指輪をそっとはめた。」

「お、おおー……動いてます、動いてますよおお」

「ゴゴゴゴ……と大きく岩が動く音がした。」

「そして中から出てきたのは……」

「階段？」

「すごい仕掛けだな」

「じゃあ行くがす！」

「みんな意気揚々と階段を下りて行くが……私はその場に突っ立つたままだった。」

「沙耶？ はやく行こう？」

「……もしかしてここ、おぼけとか……出たりしちゃう？」
「恐る恐るとたずねたその時」

「ぎゃあああああああああ！」

「ひゃあああああああああー！！」

大きなヤンガスの悲鳴に驚いた私はすかさず悲鳴を上げた。

「ちょ、どうしたのよヤンガス！ 沙耶も！」

「中から聞こえてきたのはゼシカの心配する声だった。が私には聞こえなかった。」

「大丈夫か、ヤンガス！？」

「あ、大丈夫がす。階段から落ちただけがすから」

「……あ、そう。沙耶、ヤンガスがこけたただけだから平気だよ」

「……ヤーンーガースウー？」

「この中年おっちゃんがつ！ 驚いたやんけ！」

「しかし……沙耶がおばけ怖いとは……驚いたな」

「どういう意味ですかエイトさん」

涙目になりながらも横目でエイトを睨んだ。

「でもたしかにここ気味悪いわね」

ゼシカも少し怖がっているように見えた。気のせい？

「さつさとこんなところはやく出るでがすよ」

さつきから魔物もゾンビっぱいのばっかだし……もうやだここ。

奥に、奥にと進んでいくとようやく出口らしい場所まで着いた。

「よし、ここを上がればオディロ院長に会えるぞ」

「運がよければドルマゲスがいるということね……」

「行くでがす！」

「みんな……はやく行つてえ……ここからはやく出ようよ……」

「次こそ必ず……被害は出させない！」

「兄さんの仇を……絶対……！」

「あつしは……なんか恨みあつたっけ？」

「もういいからさつさと行こうよおおお……！」

みんなが決意を固めているのはいいんですけども、早く出たいんですよ私は！

「ソウハ……サセナイ……」

小さく、でも確かに聞こえる声で。

私達の前にはおぼけが○　　¥、*　　……。

「キキキ、キタ　　……！」

「な、何者だっ！」

エイトがすぐさま剣を構える。

「ワタシハ……コノ……修……道院の……院長だっ……た」

「オデイロさ　　ん……！」

「さ、沙耶！　オデイロ院長は普通に生きてるわよ！」

「コノ……院ガ……感染症デ……ナカマハ……シンダ……」
幽霊は苦しそうな声で、少しずつ喋る。

「……」
私達は、黙った。

この人は苦しんでいるんだ。とても……悲しくて辛いことに遭ってしまつて……。

「コノ院ヲ……マモレナカッタ……コノ苦シミ……オ前達ニモ思イ知ラセテヤル……！」

「なんでそうなるの……！」

「仕方ない沙耶！　やるしかないよ……！」

「兄貴！　危ない……！」

エイトに呪いがふきかかる。……が、かき消された。
「ナゼキカナイ……！」

やはりエイトには呪いを無効化することが出来るのかもしれない。

攻撃、防御、攻撃と永遠に続くような長い戦いにも、ようやく終わりそうだ。

自分達もそうだが幽霊……なげきのぼうれいは、体力が大分減っているだろう。

「ワタシハ……ワタシハッ！」

「……苦しいんだよね」

その途端、なげきのぼうれいは攻撃をやめた。

エイト達はその隙にと攻撃を仕掛けようとしたが、私は手で止めた。

「沙耶……」

エイトが少し悲しそうな顔をするのは、私の顔も悲しい顔をしているからだだろうか。

この人は悪くない。ただ、成仏できずにいるだけ。

ここで、永遠と苦しみ続けるだけ……。

「みんなの所に行きたいんだよね？」

「みんな……みんな……ワタシヲオイテ……」

「きつと、待っていてくれているよ」

「ハヤク……みんなのトコロへ……行キタイ……！」

「強く願って……強く……そしたらみんなの所へ行けるから」

私はキュッと深く目を瞑る。

「優しさほど……強い気持ちには、ないから」

なげきのぼうれいから……暖かくて白い光が溢れた。

その光はそつとなげきのぼうれいを包み……癒していく。

「ありがとう……お嬢さん」

そして、その光とともに消えていった。

「さすがだな、沙耶」

「へっ？　そ、そうかな」

あまりにも幽霊さんが可哀想だったから本気になったけど……なんぞ照れくさいな。

「沙耶もちゃんと感情があるのね」

「どういう意味ですかそれはっ！」

ゼシカも目をこすりながら微笑んだ。

「それじゃあ、行きましょう。……オディロ院長を、救うために」

「……そうだね」

私は、目の前のはしごに足を掛けた。

……なげきのぼつれいに、さよならをしながら。

おばけ怖いまじ怖いまじ怖い（後書き）

めずらしくシリアスでしたね。はい。

やっぱり日頃からギャグだらけだと本物のシリアスになるとき違和感ありまくりだなあ……。

こゝこの小説はギャグばかりじゃないとだけ伝えときます。

リアルに牢屋とか初体験すぎる(前書き)

お久しぶりです。……これ、何度目の挨拶だろう……？

リアルに牢屋とか初体験すぎる

はしごを上り、マンホールの蓋のようなものを開けようとした。
……なにかが動く音がする。

「旧修道院はオディロ院長のいる建物の裏とつながってるのか」
エイトは関心した声をだした。

「そんなことより、はやく行かないと手遅れになるかもっ！」
私たちは建物の中へ。外の見張りに見つかからないように静かに入った。

「本がいっぱいですが……」

「図書館みたいね……」
ヤンガスもゼシカも……ゆっくりしすぎだろ！
エイトなんか本をあさりだしたし！

「あ、錬金釜のレシピ」

「そんなの後でいいから早く行くよー！」

「ご、ごめん今行く」

さっさと階段を上っていく。

もしかするとドルマゲスはまだいるのかもしれない。
だとしたら、急がねばならん。

階段を上りきると、そこにはベットで寝ているオディロさんがいた。

「っ！ オディロさん！？」

私は急いで彼の寝ているところへ行こうとする。

「待て、沙耶！」

エイトは鋭い目つきで前をにらんでいた。

こ、怖いよママン……。

「ド、ドルマゲス……」

ゼシカもヤンガスも引き締まった顔になった。

つて、ドルマゲス！？ まじでいたんすか！

「ヒーツヒツヒツ……」

ドルマゲスは冷たく笑い、杖を振りかざす。そしてそのまま……

「待て！ ドルマゲス！」

「エイト！」

エイトは剣を構えてドルマゲスのところへと走った。

だめだ。あれだけ強いエイトでも敵わない。

私は動けなくなっていた。今すぐ彼を止めなければならぬのに。

「っ！ 消えたわ！」

「なっ……逃げられた……」

ドルマゲスは杖を振りかざしたまま、その場から消えてしまった。

「なにも、できなかったがす……」

ヤンガスはポツリと言う。

それを聞いた私たちは一段と気を落としてしまった。

「で、でも！ オディオさんは無事だよ！」

「沙耶……そうね。オディオ院長は無事だわ」

ゼシカが笑顔になる。

今回は助けることができた。

他の皆もそう思ったのか、安心の顔を浮かべるようになった。

「団長！ こいつらです！ こいつらが、院長を殺そうとした奴らですよ……」

見張りの二人とM字（別名マルチェロ）がやってきた。

ああばれちった。って私らいつの間にか殺人犯と誤解されてるし！

「おや、お前たちは……」

マルチエロは怒りに満ち溢れた表情をしながら、私たちをジロジロと見る。

「……ふお……よく寝た。おや、どうした皆集まりよって」

なんてのんきなじいさんなんだ！ 癒されるぜ！

そしてそのツインテールっぽい髪型はなんだ！ 現代の若者を意識したのか！ 見苦しいぜ！

……いろいろ言いたいけれど、それを言う勇気が足りなかった。

「お体は大丈夫ですか院長！ この賊は院長を殺そうとした者ですよ！」

「待て、その者たちは怪しくない。そんな澄んだ目をした者が賊なわけなかるう」

……すいませんオディロさん。ここに約1名ほど元盗賊ヤンガスがいるんです……。

「しかし、現に見張りが……！」

「なにかの間違いじゃろう……」

「あああ、あつしが盗賊なわけななな、ないでがすよーお？」

「えっと……俺達決して怪しい者では（タンスをチェックしてた人）」

……うちの男は阿呆ばかりか。

気づけばゼシカも呆れた風にため息をしていた。

「さあ、大人しく入るんだ」

ガシャンと牢扉の開く音と共に強引に私たちは入れられる。結局何も聞いてくれず牢に閉じ込められてしまった。

「もうっ！ さっきからあんたらんとこのククールとかいうボケナスに頼まれたっていつてるじゃない！」

…… おかげで、ゼシカ様の怒りは上昇中。

「仕方ないよ、ゼシカ。これじゃあ何も聞いてくれない」

エイトは既に諦めたのか、ゼシカをはげますように話かけた。

「そんなの、エイトはいいのっ！？ 私たちはこんな所で立ち止まってる暇じゃないのよ！ ドルマゲスが近くにいるというのにつ！」

「わかってる。だけど、あちらは聞く耳を持たないんだ。少し冷静になろう」

エイトはそういうと私とヤングスをくいくいと手で招き、小さな円になるようにと命じた。

さすが、リーダー。やるときややるねえ。

ゼシカもそれを見て少し落ち着き、輪の中に入った。

「いいか。俺達は今の段階ではまずなにもできない」

「なっ ……」

ゼシカはそんなことはない、といった顔でエイトを見た。

それでもエイトは話を続ける。

「だから落ち着くんだけゼシカ。こっちは道具もすべて取り上げられていてお手上げ状態なんだ。出るには向こうから助けを求めるしかない」

「……そうね」

「助けを求めるっていったら……王様とか姫様とかしかいないよねでもククールが来るという可能性もあるかもしれない……」

「そっだな沙耶。……でも陛下と姫は建物内には入れないだろうし

……」

「ククール野郎しかいないってことてがすか」

ヤンガスがそう言ったところで、こちらへと向かってくる足音が聞えてきた。

「助け……なわけないか」

私たちは全く期待はせず、ただその足音をそれとなく聞いていた。

「……なんかやけに外が騒がしいでがすね」

「たしかに。なにかあったのかな」

聞きなれた妙な声がしていたので扉の奥を見てみた。

「わしは一国の王じゃぞっ！ そんな偉大なわしをそんな風に扱うとどうなるのかわかつとるのか！？」

……はい、どうみても王様です。

「陛下！？ どうなされたのですか！」

「エイトー！ お前らこんな所におったのかい！」

「団長。どうやらこいつら仲間みたいです」

「ふむ……。ではこの魔物も同じように牢屋に放り込んでおけ」
「はっ！」

修道院の若造は王様の襟を掴み、そのまま私たちの牢屋に入れた。

「いててっ！ わしを粗末に扱うな！」

「へ、陛下　！」

えっと……王様がログインしました。

……正直、いらないます。事態をこんがらせてるだけっす。
後はククールしか頼みはないのか……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2990r/>

ドラゴンクエスト? 空と海と大地と呪われし姫君と宝箱少女

2011年12月21日20時48分発行